

1820年代ジャワ島プリアンガン地方における開拓社会 —— グデ山南麓を事例として ——

大 橋 厚 子*

Frontier Society in 1820s Priangan, West Java

Atsuko OHASHI*

This paper discusses four characteristics of agricultural development in West Java from the early 18th to the early 19th century:

1. West Java's agricultural development in this period meets the four criteria established by I. Wallerstein [1989] for "incorporation" into the modern world system, although he did not mention Southeast Asia. The development in West Java, however, differed in that people there were mostly able to join in and opt out of cash crop cultivation in accordance with their own interests, in contrast with Wallerstein's cases, especially in India, where people had no choice.

2. The Dutch East India Company (VOC) seems to have "incorporated" West Java not because of the Company's military and economic dominance, but because of its insufficiency. In the 18th Century, Chinese merchants and workers were very active in cash crop cultivation in East and Southeast Asia. The VOC was not powerful enough to expel or defeat the Chinese merchants in West Java, nor could it control the native people without the cooperation of local Chinese merchants. It seems to have been obliged to strengthen its coffee monopoly in order to defend its coffee profits from Chinese commercial power.

3. M. C. Hoadley's "feudal mode of production" theory [1994] is severely called into question by the case of the Tjianjur regency. Hoadley claims that the "feudal mode of production" was established in West Java in the middle of the 18th century. But there is no evidence that a dominant landlord class existed in the early 19th century. On the contrary, cultivators held paddy fields that they had cleared themselves or inherited from their fathers. Was the "feudal mode of production" there so weak that it had declined quickly by the early 19th century?

4. West Java is located in the eastern border of Takaya's "Western Insular Eco-area." In other words, West Java is a transition area, which has a rich variety of topography, flora and fauna. Without these natural conditions, the VOC could not have introduced and monopolized coffee production.

は じ め に —— 問題の整理

本稿は、オランダ植民地支配下、1820年代ジャワ島プリアンゲル理事州 (Preanger-

* 名古屋大学大学院国際開発研究科 ; Graduate School of International Development, Nagoya University, Furocho, Chigusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

Regentschappen)における郡(district)レベルの開拓を、チアンジュール-レヘント統治地域(Tjanjor Rgentschap: 綴りは原文のまま)に属すグデ山南麓4郡を事例として考察するものである。この考察は、直接的には、1994年にホードレイが提出した18世紀プリアンガン地方における封建的生産様式成立説——現地人支配層が水田とコーヒー園を開発・所有し、これを経済外強制によって住民に耕作させ、地代として米とコーヒーを得る——を、実証的に批判するものである[Hoadley 1994]。この作業のより大きな歴史的位置付けについては、未だ中間報告的なスケルトンに過ぎないが、次のように考えている。

筆者はこれまで、18世紀初めから1820年代に至るプリアンガン地方社会の変容を検討してきたが、その目的は次の点にあった。

1) プリアンガン地方は17世紀末にオランダ東インド会社の支配下に入り、18世紀初頭から在地の支配関係を利用したコーヒー栽培が導入された。そして1720年代にはオランダのコーヒー収奪が軌道に乗ったため、この地方は、東南アジアの中では例外的に早期にヨーロッパ植民地支配が貫徹した地域の一つ、とみなされてきた。このように例外という位置付けによって、東南アジア同時代史から排除されてきたプリアンガン地方の動向を、同時代の南～東アジアの歴史のうねりの中に位置付け直す。

2) 当該期のプリアンガン地方社会では、近年まで政治史、土地制度史および階級闘争史の観点からは、見るべき変質は起こらなかったと考えられてきた。¹⁾これに対して、中央政権と地方社会の関係を問う観点から、当該期は13・14世紀以降現代までを分ける最も大きな社会変化——内陸地方社会の大港湾都市政権への従属——が起きた時期であったことを示す。

以上を念頭に置き実証作業を進めた結果、筆者は最近になって、これらの課題を、幾つかの議論のレベルに分けて考察する必要があると考えるに至った。現在では次の4層に分けることが妥当であると考えている。²⁾

1) グローバルなレベル——ウォーラステインの近代世界システム論との関連

ウォーラステインは、『近代世界システム 1730～1840s ——大西洋革命の時代——』

1) 代表的な例として、Legge [1980]が挙げられる。また1990年代の概説書では当該期社会に言及がなく(Tarling [1992], 桜井・石澤・桐山 [1993]など)、語らぬことによって旧来の説を延命させている。

2) 問題群を4層に分けるのは次の2つの理由による。第1に、プリアンガン地方史を全体的に捉えようとするとき、従来よく用いられてきた自説の提示の仕方、すなわちある先行研究の議論への反論、および単線的あるいは並列的な学説史の最末尾への位置付けでは、問題の構造を十分に伝えきれないと感じたためである。第2に、この数年間の実証作業の過程で、17世紀末から19世紀初めまでのプリアンガン地方の動向は、2・3の基本的要因(例えば土地所有関係、階級間の矛盾など)が常に社会変化の震源であったとは言えず、最も影響の強い要因群は時間の流れとともに頻繁に交代していると判断したためである。

[Wallerstein 1989; ウォーラーステイン 1997] の第3章「広大な新地域の『世界経済』への組み込み——1750年から1850年——」において、アジア・アフリカ地域の近代世界システムへの組み込み過程を論じ、インド・オスマン帝国・ロシア・西アフリカを事例として取り上げている。本書では東南アジアは考察の対象となっていないが、この時期のプリアンガン地方におけるコーヒー栽培、特にその生産管理の進展は、ウォーラーステインの組み込み議論に好例を提供する。

ウォーラーステインは組み込み過程の指標として、換金作物生産における「大規模な意思決定体」の出現、生産労働の強制、そして強制の手段としての前貸しの存在を指摘する。インドでは、「商館というものは船荷を売買する場所から、特別注文を発する場所となり、さらに、こうした注文に応じて生産を促進するために資金を前貸しする機能を果たし、ついには、前貸し制度を通じて生産を組織し、作業場を形成する事になった」[ウォーラーステイン 1997: 176] と言う。

一方ジャワ島では、オランダの東洋支配の拠点であるバタビアが18世紀半ば、イギリスの貿易面での発展にともなって東西交易の結節点としての地位を急速に低下させており、オランダ東インド会社は貿易以外に投資対象を得るべく変身を迫られていた。このバタビアの後背地に位置していたプリアンガン地方では、18世紀後半から19世紀初めにかけてコーヒー生産に次のような変化が起こっていた。オランダ植民地権力は1740年代から、現地人首長にコーヒー供出の割り当て量を提示し、コーヒー代金の前貸しを開始した。また1740～50年代から西ジャワにおけるコーヒー生産者の主要部分をプリアンガン地方の賦役労働者が占めるようになった。さらに18世紀末から19世紀初めには植民地権力の主導によって大規模なコーヒー農園が開設され、園内での生産管理が進展した。こうして植民地権力は、18世紀半ばまではプリアンガン地方のコーヒー生産量をコントロールしえなかったものの、その後の生産管理の進展によって、19世紀初め頃までに一定の程度ではあるが生産量を調節しえるようになっていたのである [大橋 1987]。

とはいえ、プリアンガン地方のコーヒー生産は、ウォーラーステインの抽出した組み込みプロセスに100%一致していたわけではない。第1に、換金作物生産への住民の参入の仕方が異なる。ウォーラーステインの描くインドでは、農民は、権力的強制によって自給農業から切り離されて換金作物生産に従事させられ、ほとんど選択の余地がなかった。そして彼らは自給農業から切り離されることによって貧困化したという。これに対してプリアンガン地方では、住民（流動性が高く農民とは言い難い）はコーヒー栽培への参入撤退の自由をある程度保持しており、多くの住民はコーヒー栽培への参入を経済的安定または上昇のチャンスと捉えていたのである [大橋 1998]。

第2に、ウォーラーステインは、組み込み過程の特徴のひとつとして換金作物生産と食糧生

産が地域間分業の形態をとることを指摘するが、プリアンガン地方ではこの分業はほとんど起こらなかった。それどころかオランダ植民地権力は、灌漑田耕作によって自給農業を安定させた住民世帯からの賦役労働徴発を理想として、灌漑施設などを積極的に整備した。そして住民もまた、灌漑田の獲得による生活向上と引き替えに、コーヒー栽培労役に従事したと考えられるのである〔大橋 1997〕。³⁾

以上のふたつの相違点は、1) これらの相違を生む要因を、以下で述べるようなプリアンガン地方の地域的特性の中で検討する必要、くわえて、2) 「組み込み」をヨーロッパ勢力の一方的な施策としてではなく、組み込む側と組み込まれる側のせめぎ合いとして検討する必要を感じさせる。

2) アジア間交易論との関連

プリアンガン地方の持つ地域的特徴を考察する第1の範囲として、東・南シナ海交易圏が考えられる。

前述の世界システム論のレベルで見ると、プリアンガン地方の「組み込み」は、この地方がオランダ植民地としてバタビアの後背地に位置し、さらには18世紀初めからのコーヒー生産地であったという、当時の東南アジアでは例外的な要因が大きな意味を持っていたと言える。しかし考察の焦点をプリアンガン地方の社会変化へと移動させると、事態は異なった様相を見せる。この地方においてコーヒー生産の管理強化をも含めた社会変化が本格化するのは1770年代から、なかでも18世紀末からであり、変化の内容を問わないならば、東南アジア他地域の諸社会が大変動を経験した時期と一致する。そしてこの一致の背景には、当該期のグローバルな貿易動向とともに、東・南シナ海交易圏における次のような事態があったと考えられる。

先行研究の本格的な検討はすべて今後の課題であるが、18世紀半ばから19世紀前半にかけて中国の周辺地域および東南アジアの多くの地域では、中国市場の巨大な需要を背景として、商人、資金、労働者などが流れ込み、中国市場向け産物生産のための開拓ブームが起きていたようである。中国国内での事例としては貴州の木材伐採、秦嶺山脈の木材伐採、鉄鉱石の採掘・製鉄、キクラゲ・トウモロコシ栽培と、これらの都市部への移出が見られる〔上田 1994; 武内 1994; 1997〕。さらに台湾でも大開発が行われた〔Meskill 1979〕。この時期には東南アジア各地でも換金作物・鉱産物生産、輸出、そのための開発が多く見られる。スマトラ各地およびマレー半島のコショウ栽培、バンカ島やマレー半島の錫採掘、スルーのナマコ採取などが著名

3) 耕地を占有して自給農業を行う農民の労働力を、世界市場向け作物栽培に利用する形態は、オランダ植民地政権の選択した方法と言え、ジャワ島では糖業を中心に1940年代まで続いた。

であるが、その多くは中国市場向けであり、商人・輸送業者・資金提供者は中国人・イギリス人カントリートレーダー・アメリカ人などであった。またビルマで銀や綿、ベトナムでも銀・銅が中国人商人の関心を呼んだという〔鈴木 1976; Andaya 1993; Kathirithamby-Wells and Villiers 1990; Reid 1997; 桜井・石澤・桐山 1993; 和田 1961; 藤原 1986〕。

この東・東南アジアにおける換金作物・鉱産物の生産・輸出ブームと、これに伴う中国人・カントリートレーダーの活躍とに圧倒されて、前世紀から続く政経未分化の植民地政体は、自らの財源を確保しかつ守るために、18世紀後半から特定の換金作物の栽培「強制」、生産管理そして販売独占を開始した、と推測される。著名なものは本稿が対象とするプリアンガン地方のコーヒー栽培とスペイン領フィリピンのタバコ栽培であるが、日本（より正確には薩摩藩）の近世植民地である沖縄・奄美の砂糖栽培、さらに海域は異なるものの中国を主要な市場とするイギリス領インドのアヘン栽培も類似の特徴を示す。くわえてこれらは、等しく19世紀初めから1830年ころに制度の確立期を迎え、1880年代から20世紀初頭ころまで存続するのである〔大橋 1994b: 237-239〕。

そのなかでプリアンガン地方のコーヒー栽培は、南・東シナ海交易圏の勢力が二様に作用していたと仮説を立てることが出来る。

すなわち第1に、近代世界システム論や植民地主義史観からは、植民地権力の圧倒的優位の下で進められたと見なされる「組み込み」（換金作物生産の強制、前貸しおよび生産管理の開始、さらには独占の強化）が、実は植民地権力の財源としてのコーヒー栽培を、中国人をはじめとするプライベート商人やその資金の進出から防衛するための、いわば必要に迫られての措置であったと推測できる。第2に、その一方で、当時のオランダ植民地権力の組織力・資金力では、中国人を利用した内陸輸送・内陸商業支配なくして、プリアンガン地方社会の自律性を骨抜きにし、世界システムへ組み込むことはできなかった。オランダ植民地権力は、中国人商人と資金に厳しい統制を加え、プリアンガン地方におけるコーヒー生産とその輸出から彼らを排除していたが、自らの資金・人員不足を補うために、中国人をコーヒー内陸輸送、現地人首長や住民への日用品販売、そして小規模な金融に従事させることによって、植民地権力が首長および住民に支払ったコーヒー代金を回収させざるを得なかったのである。

このプリアンガン地方のコーヒー栽培と、東・東南アジア各地の換金作物・鉱産物生産との詳しい比較は今後の課題であり、本稿ではアジア間交易論に関わる議論は扱わない。しかし次の点を指摘しておきたい。プリアンガン地方のコーヒー生産が近代世界システムに組み込まれる際に、東・南シナ海交易圏の中国人商人の活動および資金が不可欠の要素であり、かつ植民地権力の暴力的権力行使は極めて限定的であった可能性は大きい。そしてこの仮説がある程度実証されるならば、少なくとも社会経済史の側面において、オランダの植民地という理由でプリアンガン地方を同時代の東南アジア史から排除することは、この時代の歴史理解を深化させ

ると言うよりは表面的にするものと考えられる。

3) 生態、開拓社会論との関連

プリアンガン地方の地域的特徴を考察する第2の範囲として、高谷好一が生態と土地利用の観点から東南アジアを9つに分けた区分のうちの、「湿潤島嶼部西区」にほぼ等しい地域が考えられる。南シナ海交易圏の南部をなす東南アジア島嶼部は、中部ジャワ以東のスンダ列島を除いた部分が熱帯雨林気候に属す。この気候区では年間を通じて多雨多湿で乾季はない。そしてその丘陵地帯に広がる熱帯多雨林は、古来、中国やインド以西の人々を魅了する森林産物の宝庫であったと言う。またこの気候区は、人口希薄で政治的まとまりが小規模という社会的特徴を持つ。この熱帯雨林気候下の地域は、高谷によって湿潤島嶼部東区と西区に分けられるが、両区の違いは東区ではサゴヤシ栽培が重要な役割を果たしているのに対して、西区では焼畑稲作が卓越していることにあると言う。さらに、高谷は明言していないが、この西区は東・南シナ海交易圏とインド洋交易圏が交わる一帯でもあり、紀元2～3世紀から現代に至るまで東西交易の中継港が発達した地域とほぼ重なる〔高谷 1988; 1990; 1996; 坪内 1986: 9-15〕。

プリアンガン地方はこの湿潤島嶼部西区の東南端にある。ただし乾燥月が1～3カ月存在することから熱帯モンスーン気候との遷移帯と言える〔柳 1996: 6〕。さらに2連の火山山脈と盆地からなる地形によって、住民の居住地の大部分は高谷の言う熱帯多雨林と山地林の遷移帯（標高300 mから700 m）に存在する〔高谷 1988: 10〕。くわえてプリアンガン地方は湿潤島嶼部西区の山地の中では北部海岸に比較的近く、かつ熱帯モンスーン気候で相対的に人口稠密な地域（中部ジャワ）と陸続きである唯一の地域であった。

このように、プリアンガン地方はこの区のいわば辺境に位置するわけであるが、それは同時にこの地方が、当時の技術水準におけるオランダのコーヒー生産体制に適した条件の集合体として他地と比較して抜きんでていたことを意味した。山腹の山地林の存在は、コーヒー栽培に必要な冷涼な気候と肥沃な土壌を提供し、降雨と山麓の湧水は水田耕作に必要な灌漑用水を豊富に提供した。北海岸に比較的近い盆地部という地理的条件は、密輸の取り締まりの容易さとコーヒー輸送の容易さとを兼ね備え、さらに人口稠密な地域との隣接は労働力誘致を容易としたのである。プリアンガン地方におけるオランダのコーヒー収奪の成功は、中国人の協力とともに、その底辺でこれらの生態的要因の組み合わせに支えられていたと言えよう。

ところで18世紀半ば以降のプリアンガン地方におけるコーヒー生産の拡大は、主要な食糧生産方法の焼畑稲作から水田稲作への転換、すなわち水田開拓を伴っていた。⁴⁾ この水田開拓

4) 18世紀後半から1820年代のプリアンガン地方では、定住者の自給作物栽培法としての乾田・常畑は十分に発達しなかった。当該耕地で作る木灰以外の施肥を行わない当時では、畑作は地力の消耗が激しく2年連作が限度であり、そののち長い休耕期間が必要であったためである〔大橋 1994c: 145〕。

と換金作物栽培の関わりについては、1970年代以降のスマトラ、スラウェシの低湿地帯を主要な研究対象とした開拓社会論が、1980年代半ばより日本において展開を見た。自然科学の領域にはじまりエスニシティの問題など文系諸学の問題領域にまで踏み込んだ開拓社会論の練り上げには、高谷好一、古川久雄、立本成文、田中耕司を初めとする数人の研究者が取り組んでいる。これらの研究者の取り組みは単に開拓地社会の研究を目指すものではなく、「フロンティア」をキーワードに東南アジア社会の特質の解明を目指す点で注目すべきものであり、18・19世紀プリアンガン地方社会への適用を今後の課題としたい。

4) プリアンガン地方史研究との関わり

プリアンガン地方の地域的特徴を考察する第3の範囲として、プリアンガン地方そのものが考えられる。プリアンガン地方は上述の第1、第2の範囲では何れも交点・遷移帯として二重の性格を有していたが、その盆地部では少なくとも13世紀頃より地方語としてスダ語が使用されかつ政治的統合を経験していた。この地方に関する歴史研究は少数であるが既に無視し得ぬ蓄積がある。⁵⁾ ただしその大半が植民地期に執筆され、独立後は、ホードレイの近著[Hoadley 1994]を除き本格的研究成果があげられているとは言えない。そこでここでは、地方と中央政権の関係の変質に焦点をあてて、本稿対象時期の諸変化をプリアンガン地方史の中へ位置づけるデッサンを試みる。

プリアンガン地方ではすでに11世紀にスダ(Sunda)王を名乗る政権が存在していたが、その後13世紀初めまでにコショウの大量輸出が始まっており、14世紀にはヒンドゥ王国パジャラン(Pajajaran)の下でコショウが栽培され輸出されていた。その後16世紀半ばからはバンテン(Banten)・チルボン(Cirebon)などイスラム化した港湾都市の支配層が、内陸の現地人首長に影響力を行使し、内陸で栽培されるコショウの輸出を独占していた。17世紀末にプリアンガン地方を領有したオランダ東インド会社は、当初、このような既存のシステムに依存して港市国家の統治スタイルを踏襲したうえ、コショウと栽培法の似通うコーヒーの導入に成功したものと考えられる。その後18世紀半ばより植民地権力とプリアンガン地方社会との関係は変質してゆくが、これまでの実証作業から得た見通しは次のようである。

オランダ植民地権力は、コーヒー生産管理の強化(p. 322)に並行して、18世紀半ばより内陸交通に対する設備投資を開始し、19世紀初めまでにはバタビアをターミナルとする現代の幹線道路の原型が形成された。それとともにプリアンガン地方のコーヒー集荷拠点からバタビア・チルボンに至る輸送および商業網の組織主体と担い手が、プリアンガン地方の支配層からオランダ権力・中国人を中心とする植民地都市勢力へと代わった。そしてこの交通網を土台にヨー

5) 代表例がHaan [1910-12]である。

ロッパ流の地方官僚制がしかれ始めた。一方プリアンガン地方の現地人支配層は、同時期に植民地権力に資金などのバックアップを受けて灌漑施設建設、農業信用の供与を行い、移住民を招致した結果、この地方に水田耕作が普及し、住民は自給農業の安定を得た。

こうして18世紀後半から1830年頃までの時期に、大港湾都市バタビアを拠点とする政治権力が、プリアンガン地方の住民の生産活動を大規模にコントロール出来るシステムが、史上初めて出現したと言える。現在のところ、この巨大システムを成立させ作動させていた最大の要因は、植民地権力の中枢からオランダ人地方官をへて在地社会のパトロン-クライアント関係に沿って流される大規模な資金・便宜供与の流れ、およびこれに対する現地人首長・住民の積極的な対応であったと判断される。植民地権力は、資金や便宜、そして生活の安定と引き換えに、この地方の政治・経済に関わる決定権を植民地権力へ委譲させ、住民の生産活動をコントロールするに至ったと考えられるのである。この巨大システムは、十分な暴力装置を伴わないうへ、近代官僚制的組織と比較して脆弱なものであったが、1870年以降のこの地方における統治制度の整備、プランテーション企業の進出の橋渡しとして大きな役割を果たしたと思われる。さらにこのシステムの出現はプリアンガン地方が、農業開発による経済的利益と引き換えに地方の自律性を喪失し、首都バタビアに近くて安全で、ヨーロッパ人が旅行・調査するに手ごろな田舎と化すという、中央政権への構造的従属の第一歩となったのである。⁶⁾

くわえて地方文化について次の点が指摘できる。開拓が急速に進む19世紀初めのプリアンガン地方には、ジャワ人などが多数混住する開拓空間が存在し、J.S. フェーニバルの言う「複合社会」の萌芽的状态が出現していたと判断されるが、とすれば近現代のスダ文化・生活習慣はこのような環境の中から、おそらくその影響を受けて成立してきたと言える。また19世紀中頃から20世紀にかけての植民地学者は、西部ジャワと中部ジャワの土地制度の違いを慣習法圏の違いに由来すると認識していたが、プリアンガン地方の土地制度については、急速な開発が行われつつある開拓空間の土地制度が植民地権力によって慣習法として固定された可能性が高い。

以上の見通しは、植民地史観で描かれたプリアンガン地方史から近年のホードレイの研究まで、従来の研究の枠組みや個々の議論と異なる部分が多々あり、実証作業の継続とともに既存の研究の修正、再評価が今後の課題となる。

以上を念頭に置きつつ、本稿ではホードレイ説批判の一環として水田開拓の展開を検討する。

6) 1920・30年代にはプリアンガン地方はインドネシアを代表する美しい田園地帯と認識されていた [永瀧 1998: 144-145]。

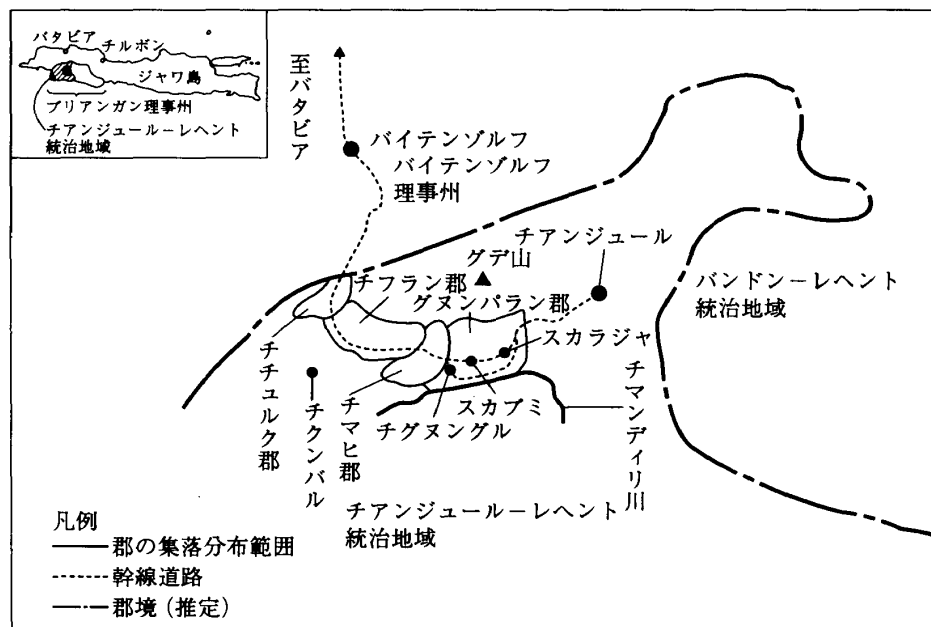
I グデ山南麓4郡の開拓史

1. 1820年代後半における4郡の性格

プリアンゲル理事州チアンジュール-レヘント統治地域に属したグデ山南麓には、1820年代後半にグヌンパラシ (Goenoeng Parang), チマヒ (Tjimahie), チフラン (Tjiheulang), チチュルク (Tjitjoeroeg) の4郡が存在した (地図1)。チアンジュール-レヘント統治地域25郡, および東隣のバンドン (Bandoenng)-レヘント統治地域18郡の中におけるこれら4郡の特徴をみると, 表1に示すように, 前3郡が引き渡し量1,500ピコル (pikol: 約60kg) 以上のコーヒー生産拠点郡であり, またチチュルクは輸送拠点郡としての特徴をもつ。

前3郡は郡面積の比較的広いコーヒー生産拠点郡であるが, グヌンパラシ郡のコーヒー引き渡し予定量9,000ピコルはこの両レヘント統治地域中最大である。さらにこの郡の人口はチアンジュール-レヘント統治地域中最大であり, 労役可能男子1人当たりのコーヒー引き渡し予定量も2.25ピコルと両レヘント統治地域中第3位であった。しかしそれにも関わらず米穀貢納負担者中の水田耕作者の比率は66%とチアンジュールのコーヒー生産拠点郡11郡中, 2番目に低かった。

これに対してチマヒ郡は, コーヒー引き渡し予定量2,000ピコル, 労役可能男子1人当たりの引き渡し予定量1.06ピコル, チフランはそれぞれ1,800ピコル, 1.88ピコルであり, この数値は上述コーヒー生産拠点11郡中, 中位から下位に位置していた。一方米穀貢納負担者中の水



地図1 グデ山南麓4郡

表1 グデ山南麓4郡

郡名	コーヒー引渡し予定量 (ピコル)	1836年のコーヒー 生産量 (ピコル)	郡の面積 (km ²)	人口 (人)	人口密度 (人/km ²)	労役可能男子 (人)	コーヒー引渡し予定量 / 労役可能男子 (ピコル/人)	貢納負担者米穀総生産量 (チャエン)	水田耕作者 / 貢納負担者 (%)	貢納者米穀総生産量 / 貢納負担者 (チャエン/人)	貢納負担者 (人)	労役可能男子 / 貢納負担者 (人)	貢納者米穀総生産量 / 人口 (チャエン/人)	労役可能男子 / 労役可能女子 (%)
グヌンバラ	9,000	10,525	161	14,358	89	3,991	2.25	9,196	66	5.2	1,752	2.2	0.64	86
チマヒ	2,000	2,739	202	8,091	40	1,872	1.06	3,851	80	6.0	642	3.0	0.47	83
チフラン	1,800	1,346	209	3,213	15	957	1.88	2,880	64	6.4	447	2.1	0.89	96
チチュルク	700	945	93	8,299	89	2,396	0.29	3,660	69	5.5	666	3.5	0.44	93

出所：[大橋 1996: 8]

田耕作者の比率はそれぞれ 80, 64% で、上述 11 郡中 8 位と 11 位となり、グデ山南麓では水田耕作の普及率とコーヒー栽培の負担とが必ずしも相関していないことがわかる。

さらにチチュルク郡は、コーヒー引き渡し予定量 700 ピコル、労役可能男子 1 人当たりの引き渡し量 0.29 ピコルと低く、また米穀貢納負担者中の水田耕作者の比率が 69% である一方で、バイテンゾルフ (Buitenzorg) 理事州と隣接する交通の要衝にあり、労役可能女子に比べて労役可能男子の人口が多いなどの特徴を有していた [大橋 1996: 8, 14]。

これら 4 郡の 1820 年代に至る水田耕作の進展は、プリアンガン地方全体の傾向とほぼ同様で、18 世紀半ば頃に始まり 18 世紀末頃より本格化する [大橋 1997: 19-23]。ただしこの 4 郡は、1813 年より約 10 年間「私領地 (particuliere landerijen)」となった。⁷⁾ そのため開拓の方式がチアンジュール、バンドン-レヘント統治地域の多くの郡とは幾分異なるうえ、開拓に関する記述史料が相対的に豊富であるので、まず記述史料によって開拓史を略述することにする。

2. 1810 年頃までの開拓史

チチュルク郡には、プリアンガン理事州の中で年代の確定できるヒンドゥー期の遺跡のうち、最も古い、11 世紀のスンダ王ジャヤブパティ (Jayabupati) の宗教施設および碑文が存在する [クロム 1985: 265-266]。そこでグデ山南麓 4 郡には、既にこの頃から人が往来し、何らかの農耕もなされていた可能性が大きい。しかしオランダ東インド会社が 17 世紀末から 18 世紀初めにかけてプリアンガン地方全域を領土とした後、1709 年に東インド総督がプリアンガン地方を旅行したときの日誌によると、この 4 郡の一角は一面の森であり、本稿対象地域の東端に

7) 本稿対象地域のほかに、チアンジュール-レヘント統治地域のチプートリ郡、バンドン-レヘント統治地域のウジュンブロン郡が同時期に私領地となっていた。

位置する峠からチチュルク郡の中心部までの道沿いには、チチュルクを入れても5つの集落とその周辺の焼畑が記録されるのみであった [Haan 1910-12: Vol. 2, 313-314]。この状態は、この一帯が17世紀中頃にバンテン、マタラム、オランダ東インド会社の三つどもえの戦いの舞台となって荒廃したためと考えられる。

上述の総督の旅行頃から、集落カンブンバル (Kampoeng Baroe: 18世紀半ば以降のバイテンゾルフ、現ボゴール Bogor) からチチュルクおよびグデ山南麓経由でチアンジュールのレヘント (regent: 会社直属の現地人首長) 居住集落へ至るルートは安定したが [大橋 1994a: 75-87]、20世紀初めに測量された5万分の1の地図 (以下、5万図と略す) で、1710年代のVOC職員の旅行日誌をたどると、18世紀初めのルートは5万図に記された幹線ルート (現在の幹線道路とほぼ同じ) よりチマンディリ (Tjimandiri) 川に近い低い土地を通過していた (地図1)。また集落チグヌングル (Tjigoenoenggoeroe) は、チアンジュール、カンブンバル-レヘント統治地域との境界、かつチクンバル (Tjikoembar) への道の分岐点に、東インド総督の命令で建設された集落であり、オランダ東インド会社がこのルートの維持を重視していたことがわかる [Haan 1910-12: Vol. 2, 313-314]。なお1730, 31年の旅行記においてもこの一帯の開拓が進んでいる状態は述べられず、かつ集落チグヌングルがルートの拠点であった [Anonymous 1875: 3; Haan 1910-12: Vol. 2, 462]。

以上の状態に変化が始まるのは、オランダ東インド会社がバタビアの後背地に経済的関心を持ち、開発に力を注ぐ18世紀半ばになってからである。まず1744年にはチアンジュールからグデ山南麓ルートで、水牛の引く荷車を使用したコーヒー輸送が報告されている [Haan 1910-12: Vol. 2, 492, Vol. 4, 584-585]。これはこの年までに荷車の通行が容易な、現在の幹線道路に近い道が整備されたことを意味しようが、同時にこの一帯でもコーヒー生産が開始されたと推測される。さらに、1740年代半ばにはバイテンゾルフが植民地支配の拠点として建設され、総督は町の周囲に東方のジャワ人を入植させて水田耕作をさせた。50年までには人口も増加し、51年からはバイテンゾルフで週2日の市が立つことになった [大橋 1994a: 99-100]。こうして始まった水田開発はグデ山南麓にも波及したようであり、1777年のオランダ東インド会社職員の旅行記によれば、スカラジャ (Soekaradja: グヌンパラン郡東部) からチマヒまでのルート沿いに水田および用水路が散見され、乾季作も行われていた [Anonymous 1856: 169-172]。なおこの間にレヘント統治地域の境界が変更され、チチュルク郡を西端とするグデ山南麓一帯は、1751年までにチアンジュールのレヘントの支配下に入った [Jonge 1862-1888: Vol. 10, 245; 大橋 1994a: 78]。

この1777年にオランダ東インド会社は、これまでレヘントに支払ってきたコーヒー代金を、バイテンゾルフでコーヒーを引き渡す住民に対しては彼らに直接支払うことを決定したが、その後18世紀末までにバイテンゾルフのパサールでの商業活動が盛んとなり、チアンジュール-

レヘント統治地域にも影響が及んだ。1786年にはコーヒーの仲買人が登場し、1790年代末には仲買人がコーヒーを青田買いすることが報告されている。この仲買人が中国人であるか現地人下級首長や有力者であるかは不明であるが、住民もまたバイテンゾルフへ出向き塩、布、陶器、鉄器などを購入していた。くわえてバイテンゾルフのパサールを請け負う中国人による、チアンジュール-レヘント統治地域に対する商業・金融支配が浸透していったと考えられる。18世紀末までにチアンジュールのレヘントは、バイテンゾルフのパサールを請け負う中国人と結託して塩専売と椰子砂糖集荷を独占して利益をあげており、オランダ植民地権力は1790年代末から19世紀初頭にかけてレヘントの商業的独占を解除しようと努力していた [Jonge 1862-1888: Vol. 11, 364-365; 大橋 1994a: 97-100; Haan 1910-12: Vol. 4, 597-598]。

以上はチアンジュール-レヘント統治地域全体の記述であるが、バイテンゾルフの発展は、この町に最も近い、グデ南麓4郡に最も大きな影響を与えたとみて間違いのないであろう。たとえば、19世紀初頭にオランダ政庁の主導によってグデ山南麓に巨大なコーヒー園が開設されたのち、1806年にはこの4郡の内部にある集落チフランおよびスカラジャ（第II章で細述）で住民の生産したコーヒーが買い取られることになったが、住民は、チフラン、スカラジャよりバイテンゾルフでコーヒーを引き渡すことを望んだのである [大橋 1994a: 109]。

3. 私領地として (1813～1823年)

本稿対象地域は1813年から1823年の間、私領地として、主にA.ド=ウィルデ (Andries de Wilde; 以下ウィルデと略す) の経営下にあり、開発が行われた。ウィルデは1781年にアムステルダムに生まれ、1803年に家族と共にジャワへ来た。その後総督ダーンデルスに重用され、1808年にバイテンゾルフのコーヒー監督官に任命された。1809年にはバンドンへ配置換えされ、さらにそのすぐ後に最も利益の多いタロゴン (Trogong: バンドン-レヘント統治地域ティンバンガンテン Timbanganten 郡都) へ配転された。タロゴン在職中の1811年にジャワ島が英領となり T. S. ラッフルズがジャワ副総督として着任すると、ラッフルズは彼を留任させ、14年にはバンドンの監督官として重用した。ウィルデは同年公務から退いたが、ラッフルズはこれを惜しんで15年にプレアンゲル理事州の種痘監督官に任命した (19年まで)。このラッフルズのもとでウィルデは1813年に、本稿対象4郡とチチュルク郡南隣のパンガサハン (Pangasahan: 1820年代後半には Tjidammar 郡となる) を私領地として購入した。この私領地購入は、ラッフルズ、マッコイド (Macquoid: 当時のプレアンゲル理事州理事官、イギリス人)、エンゲルハルト (Engelhard: 元オランダ東インド会社職員、オランダ人) との共同購入であったが、実質的な経営は、14年初頭からスカブミに居住したウィルデが一手に引き受けていた。しかし1818年にジャワ島がオランダに返還されて、1819年1月に総督ファン・デル・カペレン (Van der Capellen) が着任し、20年3月に総督の甥がプレアンゲル理事州理事官に着任する

と、私領地は、中国人が不法に出入りする密輸基地でありオランダ政庁の利益を損なうものとして敵視されるようになった。21年のウィルデの本国での訴えも効を奏さず、スカブミは1823年に政庁によって買い戻されるに至り、同年ウィルデは本国へ帰国した。その後ウィルデはプリアンガン地方事情を執筆し、30年にはこれを著書として刊行し、41年には初のスンダ語（プリアンガン地方の地方語）辞書を刊行した [Haan 1910-12: Vol. 1, 284-309]。

ウィルデは、プリアンガン地方開発の提言書であり私領地経営弁護の書とも言えるその著書の中で、その経営を次のように述べている。

彼はこの5郡からなる私領地に居住している人々が一つの名の下に一つの家族 (huisgezin) の如く統合されるようこの地をスカブミ (Soekaboemi) と命名し、居住者がスカブミ人 (orang Soekaboemi) と呼ばれるよう願った。そして全ての首長達、および集落毎に1～2名の長老 (kokolot) を召集して、通訳を介さずにスンダ語で会合を持ち、住民の財産保全と首長の恣意的収奪の廃止を徹底させた。貢納は米、綿、katjang mienjak (落花生の可能性が高い。直訳は油豆) の5分の1を徴収し、コーヒー・椰子砂糖についてはこれまでレヘントが得ていた手数料および専売の利益を領主が取ることにした。米穀の貢納については、既に開田されている全ての水田の面積を測定させ、平年の収穫量を算出して貢納の量を決め、水田所有者・水田面積・水田の等級・貢納量等を記した台帳を作成させた。一方、焼畑と陸田は収穫毎にその5分の1を納めさせた。米穀貢納は現金あるいはコーヒーで納めることも可能とした [Wilde 1830: 199-207]。

このほかウィルデはタバコおよびコショウ栽培を導入し、牧畜を振興させたほか、水田を開墾する者には必要な品を貸与したという。道・橋を補修し、灌漑用の水路を開削したが、用水路については私領地領主の費用で開削したことを強調している。さらにスカブミに領主の費用でモスクを建設し、集落ランバイ (Rambay: チマヒ郡所属) にある宗教学校を補修した。また各地を巡回し、集落の周りにはココヤシなどの果樹、竹、コーヒーなどを植えさせたと述べる [ibid.: 207-209]。

このような政策の結果、現地人首長および住民達の生活は向上したという。米穀、椰子砂糖、コーヒーの生産が増大し、人口も増加した。近隣そして遠方から多くの家族 (huisgezinen) がこの地に移住し、貢納が重く恣意的収奪が激しい政庁直轄の郡からは、首長達がその配下の集落の住民全員と共に移住してくる場合すら存在した。スカブミでは増加する移住者によって、多くの新しい集落が設立され、みすてられていた土地に人口が戻ったという [ibid.: 209-212]。

ウィルデは灌漑田開拓について次のように仔細に述べている。

ウィルデは日雇い労働を利用して用水路建設工事を起こした。このうち巨大なものとして、1819年以前に完成したチコラウィン川 (Tjikolawing: 場所不明) の工事があり、その水路は全長7.5 kmでボートで航行可能であったと言われる [Haan 1910-12: Vol. 1, 292]。ただしウィル

デは工事の具体的組織については、地域に即した知識を持つヨーロッパ人がいないため、現地人支配層と現地人の水利職人 (malim) に主導させる方法を提唱していた [Wilde 1830: 45]。

さらにウィルデによれば、各レヘント統治地域には水田耕作やその他の耕作に適した山麓と平地が開拓されないまま存在しているが、その理由の一つに、これらの土地がレヘントや郡長の狩り場として使用され、耕作が禁じられていることがあげられる。この地方では狩り場には悪霊が住み、耕作すると祟るといふ迷信がある [ibid.: 40-41]。これらの狩り場は、1790年代より各地で徐々に耕地化されたと考えられるが [大橋 1998: 第2章]、ウィルデはスカブミの様々な場所で、次のようにしてこの迷信を払拭したという。

水路を掘り始める前に、犠牲を奉納することでその場所を清める。集合したイスラム役人 (ウィルデは「僧 priester」と呼ぶ) たちは1匹の黒い山羊を犠牲とし、香と祈りで悪霊達 (Djoericks) を退散させる。その後作業が始められる。第2の、そしてより大きな儀式は、耕地に予定された土地に水路が到達した時に行われる。首長と住民とともに郡のイスラム役人たちが全員集合する。1匹かそれ以上の黒い水牛が犠牲にされた後、工事の完成を祝福し、悪霊達が灌漑施設を駄目にしに来ないように、そして用水を利用したい人々が邪魔されないように、イスラム役人たちが祈る。用水を利用して水田を造成するか、既にある水田に水を引こうと考える人々は、小さなコップをこの水で満たして飲み干し、捧げ物としてイスラム役人たちに水の代金を支払う。通常は2スタイフェル (stuijver) である。儀式は歌と踊りで終わり、悪霊達は二度と来ないと考えられる [Wilde 1830: 42-43]。

この儀礼の次第や由来の検討は今後の課題であるが、儀礼は既に定式化され、執り行われていたと考えて良いであろう。

さらにウィルデは開拓促進のために開拓者へ可耕地および金品をも援助した。「近隣の郡からの移住者には、水田にする土地が与えられ、さらに必要なものは全て提供される」 [ibid.: 212-213]。「新しい水田を開こうとする者で、農具、水牛、そして種籾すらも持ち合わせない者は、これらを提供され、その後の収穫の一部から分割払いで支払う」 [ibid.: 208]。これらの記述は、水田開拓にあたり「この地では土地、水、水牛、農具、そして必要であるならば、食住が提供される」 [Haan 1910-12: Vol. 4, 507] という1821年のスカブミの行政官の報告とも一致する。なお開拓者には、多くの場合、水田耕作技術を持つ移住者が想定された。

一方ウィルデは私領地内の焼畑民について、その生活は不安定、危険、かつ惨めであるとの認識を持っていた。焼畑民を水田耕作者にするために、一般には上述の方法が採られたが、特例としてウィルデが自らの費用で水田・水牛・農具を与える場合もあった。こうすることによって定着の初年から家族構成員全員を養えるようになるという。そして次のような焼畑民の定着法を政庁に提案している。すなわち灌漑可能な土地に、誰かに請負の形で水田を造成させた後に焼畑耕作民を集め、集落を設立できる土地を示して森へ帰ることを禁止する。こうする

と1～2年で帰還しなくなると言う [Wilde 1830: 133-134, 222-223]。

開拓後の貢納の賦課についてウィルデは、水田には2年または2収穫まで賦課せず、一方で焼畑、陸田には初収穫から賦課した [ibid.: 225]。また耕地所有についてウィルデは自らが私領地所有者であるにも関わらず、水田は住民が所有者 (eigenaar) であり、所有 (bezit) する——少くとも占有すると観念していた [ibid.: 219, 204-205]。このことは1821年にスカブミの行政官が、水田耕作民は父や祖父が既に所有者 (eigenaar) であった水田にしがみついており、水田は世襲相続されると考えられる、と報告していることと一致する [Haan 1910-12: Vol. 3, 126]。

最後にウィルデが生産を奨励した椰子砂糖について説明しておこう。椰子砂糖はすでに1680年代からプリアンガン地方中のバンドン、スメダンで生産されており、18世紀後半にはおそらくグデ山南麓でも生産が開始されたと考えられる [ibid.: Vol. 3, 218]。ウィルデはグデ山南麓での増産に力を入れ、椰子砂糖を独占的に買い上げることによって、早くも1814年にチチュルク、チフラン郡のみで4,000ピアストル (Spaans matten) の利益を挙げていたというが、これは少なく見積もっても2,000ピコル以上の生産を意味する。利益額から推測すると1821, 23年もほぼ同水準の生産量であったと考えられる [ibid.: Vol. 1, 293; Vol. 4, 502; Algemeen Verslag 1823: 35]。

ウィルデは言う。砂糖椰子は山々の森の何処にでも生えている。実の生る若い枝を切ると樹液がしみ出すので、枝の根本に竹つつを掛けて受ける。樹液がたまったら鍋で煮詰め、竹筒に移して固まらせる。彼によればこの糖蜜を含む黒糖は、放置すると酒から酢になり日持ちはしない。ジャワ人および中国人、特に前者が主に消費する。椰子砂糖は大変利益の上がる輸出品で、スカブミでは数百家族が生産に従事し、生計を維持している。椰子砂糖は煮詰めた者がバイテンゾルフで中国人に渡し、かわりに砂糖を煮詰める鍋、リネン、タバコなど欲しい物を受け取るが、中国人は、椰子砂糖が日持ちせず、他所へ輸送不可能であることを見越して、しばしば買いたたくと言う [Wilde 1830: 97-98, 203, 207, 232-233]。なお砂糖椰子の樹液は一年中採取可能であり、当時のプリアンガン地方では、灌漑用水が少なく米穀の自給が不可能な土地で、米穀との交換のためにしばしば採取され加工された [Haan 1910-12: Vol. 2, 712-713; Vol. 4, 502]。

以上のウィルデによるスカブミ開拓の検討は、史料のほとんどを、自画自賛をメッセージとするウィルデの著書に依拠するという限界がある。しかしウィルデの施策によってこの地に何らかの経済活動の活性化があった可能性が大である。1820年代初めにオランダ政庁がこの私領地を敵視したことは、私領地が注目に値する富の生産に成功し、これをウィルデが享受していたことを示そう。さらにウィルデにかならずしも好意的ではない植民地史家のF. ド＝ハーンもまた、ウィルデ経営下における効率的な収奪の実施・管理強化・開拓によって、何らかの経

済的活動の向上があったと述べる [ibid.: Vol. 1, 291]。

4. 私領地経営の影響

1818年以降のオランダ政庁のプリアンガン地方統治は、商業においてウィルデが行動を共にしたダーンデルス・ラッフルズの政策とは異なるものであった。オランダ政庁は早くも1821年に中国人その他の東洋外国人の滞在、活動を許可制にして厳重に管理するようになり、中国人の経済力を自由に発揮させようとするラッフルズ等の政策を転換させた。また買い戻し後の旧私領地は、プリアンガン地方の植民地文書を見る限り、レヘント統治地域下のその他の郡と全く同様に処遇された。⁸⁾

しかし生産に関する政策については、オランダ政庁はウィルデの方針を大きく変更することではなく、むしろ踏襲したと考えられる。椰子砂糖を例にとると、オランダ政庁は私領地買い戻しの後に、椰子砂糖をコーヒーに次ぐ財源と見なすようになった。産地として旧私領地であるスカブミを重視し、1824年にはスカブミから3,253.4ピコルを買い上げた [Algemeen Verslag 1824: 巻末統計]。そしてプリアンガン地方の椰子砂糖生産は強制裁培制度期（1830年-1870年）にピークを迎えた [Klein [1932]: 100]。またコーヒーと米穀も、ウィルデの経営下で生産が増加したと考えられるが、20年代後半にはさらに増加率が拡大した [Algemeen Verslag 1824, 1827, 1828/29, 1830/31/32: 巻末統計]。こうしてみるとウィルデによる私領地経営は、18世紀末から19世紀初めにかけての貿易および政治的混乱に由来する、プリアンガン地方の経済混乱を修復し、その後の政庁主導の経済開発の出発点となったかの観がある。

5. 小結

以上、やや視点の偏った記述史料によって本稿対象地域の開発を見てきた。しかし1) この地域で植民地勢力が水田開拓を奨励し、大規模灌漑工事は植民地勢力が自らの資金で行ったこと、2) 個々人の開拓者には水田造成にあたり資金や必要資材と日用品提供の便宜が図られたこと、3) 「私領地」内部では水田の所有者は現地人首長でなく住民と認識されていたこと、そして4) 作物はコーヒーと水稻に限らず、タバコ、砂糖椰子、コショウから竹、ココヤシ、果樹栽培なども奨励されたことを否定し去ることは難しいであろう。私領地は極めて特殊な事例であり、時期もまた19世紀初めであるとは言え、本稿対象地域でもまた、ホードレイの封建的生産様式成立論とは異なる開拓の具体例が現れたと言える。

次章では、この具体例を面的、数量的側面から考察したい。

8) ただし1820年代末の郡別統計中でゲデ山南麓4郡において人口に対する米穀貢納者の比率が高いことは、ウィルデの行った台帳作りの影響が残ったものと考えられる [大橋 1996: 10]。

II グデ山南麓4郡の開拓状況

1. 史料と分析方法

本章では、1820年代後半のチアンジュールレヘント統治地域に属する25郡のうち、グデ山南麓の4郡について、郡毎に開拓の概況および開拓のおおよその時期や順序を考察したい。

利用する主な史料はこのレヘント統治地域全域を初めて網羅した人口統計である「1827年チアンジュールレヘント統治地域の人口統計 [Bevolking van het Regentschap Tjanjor in December 1827]」（以下、「人口統計」と略す）と20世紀初めに測量された5万分の1の地図 [参謀本部陸地測量部 1943]：以下、5万図と略す）である。「人口統計」掲載集落の所在を5万図によって確認し、集落名、集落の規模・分布形態、集落分布地域の地形・灌漑工事跡、さらに集落内の労役可能男女の比率・1戸 (huishezin) 当たりの労役可能男子の平均人数などを検討する。そしてこれに断片的な記述史料および筆者の景観観察から得られた情報を加える。以上の指標やデータは、開拓状況を示す根拠として単独では薄弱であるが、複数の指標における考察結果が同一の傾向を示すならば、判断の蓋然性は高まろう。筆者の方法は1820年代から20世紀初めまでの集落の移動、改名に対して無防備であるが、本稿対象4郡の「人口統計」掲載集落465のうち331(71%)が、名称・位置ともに無理のない状態で所在が判明したことは、この方法がある程度有効であることを示そう。なお「人口統計」をはじめとする1820年代の統計の数値については、本稿では集落数以外は絶対値として扱わず、本稿対象4郡の、チアンジュールレヘント統治地域内での相対的位置を示す目安として使用する。史料批判については、1996年の拙稿を参照していただきたい。

以下、本節では郡毎の分析に先立ち、1)において本稿対象4郡の開拓に関わる量的指標の一つとして、18世紀後半から1820年代に至る人口の増加を示し、2)において、上述のアプローチに従った作業から、帰納的に導き出された開拓地に共通する傾向を指摘する。

1) 植民地権力が掌握した人口

表2は、筆者が探し出すことの出来た18世紀唯一の郡別人口調査と、「人口統計」とを比較したものである。植民地権力が掌握し得た住民は、この50年ほどの間に大きく増加した。グヌンパラン郡を見ると、集落数で1.9倍、戸数で4.8倍、1集落毎の戸数も、5.8戸であったものが、15.4戸と増加した。グヌンパラン以外の郡はこの期間に郡編成が変化したので一括して比較すると、集落数が1.3倍、戸数は4倍で、増加率はグヌンパラン郡よりやや低くなる。ただし1集落毎の平均戸数は、4.3戸から12.2戸へと、グヌンパラン郡と同様に大きく増加している。くわえて「人口統計」掲載のチアンジュールレヘント統治地域25郡において、集落毎の平均

表2 オランダ植民地権力の掌握人口

1777年			1828年		
郡名	集落 (kampoeng)	家族 (huisgezin)	郡名	集落 (kampoeng)	家族 (huisgezin)
グヌンパラン郡	92	539	グヌンパラン郡	174	2,681
チマヒ郡	115	515	チマヒ郡	122	1,856
パガドンガン郡 (Pagadoengan)	125	517	チフラン郡	79	840
			チチュルク郡	111	1,431

出所：[Jonge 1862-1888: Vol. 11, 364-365; Statistiek Handboekje 1828]

戸数が10未満の郡は、焼畑が卓越した郡であることがわかるので、戸数の増加は焼畑の卓越した状態から水田稲作を主要な食糧生産形態とする状態への移行を推測させる。

なお、18世紀末から19世紀初めにかけての水田開拓の中心がグヌンパラン郡であったことは、上述の数字およびウィルデがスカブミを中心集落としたことから推測可能であるが、特定の集落名からも推測できる。本稿対象4郡の中で、灌漑に関わる画一的な地名が存在するのは、グヌンパラン郡のみであった。「カバンドンガン (Kabandoengan: 堰)」は、ゲデ山東南麓およびチアンジュール盆地底部にも見える集落名であり、1998年の拙稿の検討からその建設年代は19世紀初めと推測される [大橋 1998: 77]。この名を持つ集落はグヌンパラン郡に3あるうえ、そのうち1集落はスカブミのすぐ上流に存在するので、ウィルデの統治期 (1914～23年頃) に成立した可能性が高い。このほか、必ずしも溜池を指すものではないが「池集落 (Lemboer Site)」の名称を持つ集落が、スカブミの北に1、西の郡境付近に2、南の郡境付近に1存在する。そこでグヌンパラン郡では短期間に集中的開発が実施されたと推測される。

2) 開拓地に見られる集落分布、集落人口のパターン

開拓地に見られる集落分布形態、労役可能男女の比率、および戸数と労役可能男子の比率が示す傾向性を見みると、まず集落分布形態について、本稿対象期において灌漑用水に恵まれかつ用水を利用しやすい一帯には、人口100～300人の集落が多く見られるが、従来灌漑用水に恵まれなかった新開地においては、しばしば次の2つの形態の集落分布が見られた。一つは、この地方の通常集落規模を遙かに越える集落 (350人以上) が比較的規模の大きい灌漑施設の周辺に単独で存在する形態であり、今一つは、相対的に大きな人口を擁する1集落の周辺に小集落が衛星のごとくに散在する形態である。プリアンガン地方では大集落には郡内の下級首長が居住していると考えられるので [大橋 1995: 36-42]、これらの形態では下級首長が配下の住民と共に入植地に居住し、後者の場合では周囲の小集落を統括していたことが窺われる。

第2に、労役可能女子に対する男子の比率を見ると、ジャワ島の人口統計は19世紀初めから植民地期末期に至るまで女性が多くカウントされているが、これは一般に、賦役貢納、徴税を逃れるためであると考えられている。「人口統計」より換算すればグヌンパラン郡86%、チマヒ

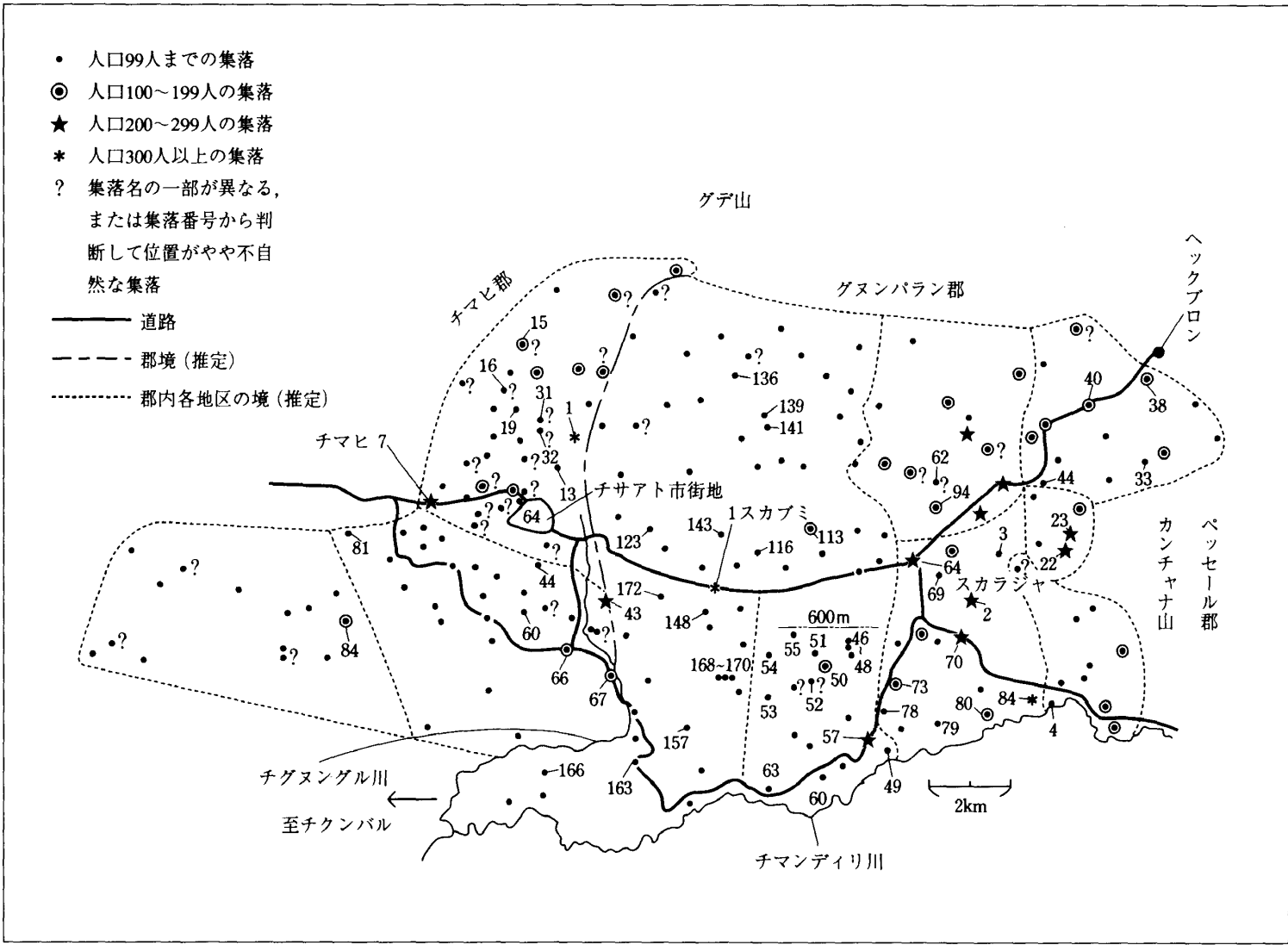
郡 83%, チフラン郡 96%, チチュルク郡 93% であり, チアンジュールレヘント統治地域から焼畑の卓越する南部辺境 5 郡を除いた 20 郡中, それぞれ 16, 18, 6, 9 位である。さらに各郡の中でも男性がより多い地区と, 女性がより多い地区とが存在するが, これまでの作業からは, 男性の多い地区では交通の拠点あるいは新しい開拓地を示す指標が多い。記述史料からも新たに水田を開くため最初に移住するのは, 主に単身の男であることがわかる [大橋 1989: 120-121]。その一方で, 女子が平均比率よりかなり高い地区は, 比較的早期から徐々に開拓され本稿対象期には安定した水田地帯であったことを示す指標が多い。この場合賦役貢納を逃れるために労役可能男子数を偽っているか, 賦役貢納の負担が重く実際に労役可能男子が逃亡していることが考えられる。

第 3 に 1 戸当たりの労役可能男子数を見ると, 本稿対象地域ではグヌンパラン郡 1.48, チマヒ郡 1.00, チフラン郡 1.14, チチュルク郡 1.67 であり, それぞれ 8, 20, 18, 3 位である。この値も郡内の各地区毎にばらつきがあるが, 概して戸数より労役可能男子が少ない集落は比較的規模の小さい集落の場合が多く, また 1998 年抽稿では, 灌漑工事が失敗に帰した地区, および幹線道路付近にしばしば存在した [大橋 1998: 第 2 章]。本稿でも, 開拓条件のあまり良くない一帯, 幹線道路付近に多く見られるので, 農業基盤の不安定あるいは過重な賦役貢納の負担による生活の不安定を原因とした労役可能男子の逃亡あるいは過少申告が推測される。これに対して 1 戸当たりの労役可能男子が 1.7 あるいは 2 人以上と多い集落は, 比較的早期に開拓された水田地帯のなかの比較的規模の大きい集落に見られる。この傾向は植民地文書の記述に見える, プリアンガン地方では親の世帯と成人した子供たちの世帯が一つの戸として登録されていることの反映であろう [Koffij Report 1818: 11; Haan 1910-12: Vol. 4, 402-403]。

以上, 述べてきた各指標の数値に見られる傾向は, これら一つ一つでは別の解釈も可能である。しかし開拓に関わる幾つかの指標と組み合わせるならば, 開拓状況を示す補助資料として利用可能であろう。

最後に, 重要であるもののいまだ本格的に検討を加えていない問題について見通しを述べておく。本稿対象 4 郡の年間降雨量はほとんどの地点が 2,400 mm を超え 4,000 mm に達するところもある。かつ降雨量 50 mm 以下の乾燥月は無い。しかしそれにも関わらず, 第 I 章および本章で使用する記述・統計資料の何れもが, この一帯で天水のみに頼る稲作が不安定・低収量であることを指摘する。現在のところ, この疑問に対する最も妥当な仮説は, 地形から判断してこの一帯は減水深が極めて大きいというものである。⁹⁾

9) 河野泰之京都大学東南アジア研究センター助教授に御教示いただいた。



大橋：1820年代ジャワ島ブリアンガン地方における開拓社会

地図2-1 グヌンパラン郡とチマヒ郡

2. グヌンパラン郡

「人口統計」掲載集落でグヌンパラン郡に分類される 174 集落中、152 の所在が判明した。所在判明集落は、グデ山南麓に広く分布し、東はグデ山とカンチャナ (Kantjana) 山鞍部まで、西はチグヌングル (Tjigoenoenggoeroe) 川、南はチマンディリ (Tjimandiri) 川を境界とする (地図 2-1 参照)。1 集落当たりの平均人口は 83 人で、チアンジュールレヘント統治地域 20 郡中、13 位である。

「人口統計」では郡毎に各集落に番号が付されており、ほとんどの場合、番号の近い集落は地域的にまとまりをもって分布している。これは郡の下位行政単位毎に統計の集計が行われているためと考えられる。そこで以下、集落番号の若い順に、集落分布範囲の地形を検討してゆきたい。

1) スカラジャ東南部

グヌンパラン郡で番号 1 を付された集落は、標高およそ 600 m の郡都スカブミ (人口 511 人) である。集落名称の意味は、soeka=好む、boemi=土地あるいは住民であるが、プリアンガン地方でスカの付く集落名は現地人支配層あるいは植民地権力によって建設された集落であることを示す。つづく 2 番集落「赤い水 (Tjibeureum)」(290 人)、3 番集落「ククチェン (Keketjeng:「きつく張る」の意か)」(69 人) は、スカラジャの東に飛び離れて分布しているが、18 世紀半ばまで使用された旧幹線道路上の重要拠点であったのではないかと考えられる (第 I 章第 2 節参照)。

次の 4 ~ 19 (または 21) の番号を付された集落の多くは、グヌンパラン郡東南端の小盆地内に見いだされる。この盆地の底部は南北 4 km、東西 2 km 程で、標高は 580 ~ 650 m である。底部の傾斜は緩やかで 5 万図では一面の水田である。盆地を囲む山から流れる小川は盆地中央部で合流した後、底部南端を流れるチマンディリ川に注ぐが、5 万図からは用水路など比較的大規模な灌漑工事の痕跡は確認できない。集落の多くは盆地底部の西端の山脚部および小川のほとりにある。人口 100 人を越える集落は、盆地底部中央の小川のほとりに 1 (165 人)、およびチマンディリ川近くに 2 (109, 153 人) 存在するが、集落当たりの平均人口は 70 人弱と郡平均より低めである。

集落名を見ると、盆地内には灌漑・水田に関わる名称、および宗教・賦役貢納・支配層に関わる名称はなく、意味が判明する集落名は全て動植物・自然地形を示す。さらに「痩せた土地 (Nagrak)」、「野原 (または畑地: Tegal)」などの名があるところから、灌漑工事なくして水田化しえない土地もあったと思われる。また 5 万図に書き込まれた集落の数は「人口統計」掲載集落数より 2 倍近く多いので、盆地内部はいまだ 1820 年代には開拓の余地が残っていたと言えよう。一方、所在不明集落は 4 あるいは 6 (不明集落が地域の境界にあるので正確な数の特

定は不能)存在するが、これらが、開拓後の農業や生活の不安定性のために離散した集落である兆候は窺えない。すなわち5万図上には集落名が明記されない集落が多いうえに、不明集落の戸数や労役可能男女人口数がアンバランスであったり、集落番号が連続している集落やある地区の集落が集中して消えているといった特徴が見えないのである。

以上、この一帯では大規模な開拓は行われず、山脚部・小川のほりなどで小規模な開拓が積み重ねられつつあったと考えられる。水田開拓開始期は不明であるが、18世紀半ばなど案外早い可能性もある。というのは、スカラジャから南海岸へのルートおよびチアンジュール盆地へ至るルートがこの盆地の南端を通過しており、チマンディリ川沿いが交通の要衝をなしていたためである。西南側の盆地の入り口に「要塞 (Benteng)」(番号4:33人)の名をもつ集落があるのはこのためであろう。

第3のグループの集落番号22(あるいは20)から28の集落は、上述の盆地の北、カンチャナ山西側のグデ山スロープ上に分布する。標高は650～800mであり、傾斜は上述の盆地底部よりやや急であるが5万図では一面の水田である。この一帯から湧き出る泉は西北部に3つあるものの、この一帯を主に潤すのはグデ山の標高1,000m程の険しいスロープに端を発する3本の小川である。5万図ではこれらの小川の水はこの一帯で分水されている。所在判明集落はこれらの小川・水路沿いにあり、人口200人以上の集落が2、100人台が2、残りの集落も1つを除いて70人以上である。集落規模、および集落毎の戸数と労役可能男女人口のバランスから判断するならば、1820年代末には開拓後一定の 때가たち、安定した水田地帯となっていたと考えられる。なお所在不明集落が2存在するが、5万図ではこの付近に集落名を明記していない集落が幾つかあるので、これらが離散集落であるかどうかは判然としない。

ついで集落名を見ると、「堰」(番号23:201人)が用水路の分岐点の下流にあり、さらに下流には「チプリアンガン (Tjiprijangan)」(番号22:227人)がある。理事州の名称ともなった「プリアンガン」の意味は多数あるが、主要な意味は「神の場所」であり、何らかの宗教施設に関わる可能性がある。

またこの一帯は18世紀前半にチアンジュール-カンブンバル間の幹線道路が通っていたところであり、チプリアンガンはすでに1709年の旅行記に小川の名前として登場する [Haan 1910-12: Vol. 2, 313]。そして幹線道路がより北を通過するようになったのちもスカラジャ近郊の物資供給地となった可能性があり、水田開拓は早ければ18世紀半ばには始まったと考えられる。くわえて「堰」集落があることから、グデ山東南麓のカリアスタナ (Kaliastana) 郡と同様に、19世紀初めにさらに灌漑工事が行われたと考えられる [大橋 1998: 80-81]。

2) スカラジャ東部

集落番号29～45の集落は、5万図のチアンジュール-バイテンゾルフ間の幹線道路付近の

標高 800 m 程の一带にあり、西は上述のスカラジャ東南部の北から、東はペッセール (Pesser) 郡に属す集落ヘックブロン (Gekbron) の手前までに分布している。5 万図では幹線道路以南はほぼ水田であるが、幹線道路以北は水田が少なく、西半分で地表の 20 ~ 30%、東半分では皆無である。この一带は全般的に小川・湧水が少なく、用水路など灌漑工事跡も認められない。特に東半分には小川は存在せず、所在判明集落のなかで幹線道路よりはずれて南に存在する集落 4 つのうち 3 つまでがカンチャナ山の山脚部にあるので、水田があるとすればカンチャナ山からの水を利用していると考えられる。一方西部の集落はみな小川のほとりにある。

集落規模を見ると人口 100 人台の集落 7 つのうち 5 つが幹線道路上にあり、しかも東部と西部にそれぞれ 2、中央に 1 と、小川の分布とは無関係に存在する。集落名を見ると、灌漑・水田に関わる名称が存在しない一方で、鞍部には「セレーの生える野原 (Tegalsareh)」(番号 33: 34 人)、支配層の狩り場に由来するであろう「スカマララン (Seokamararang: 好む+禁止の意味)」[Wilde 1830: 41] (番号 40: 163 人) があり、荒れ野であったことがわかる。さらに幹線道路上には、「大工の使用する定規 (Pasekom)」(番号 44: 18 人)、「茶碗 (Mangkok: マレー語)」¹⁰⁾ (番号 38: 153 人) と職人の存在を示す集落名がある。

そこで、この一带の集落平均人口は 94 人と郡の平均より多いものの、幹線道路の存在が招いた人口集中であり、水田はわずかで、特に東部では少ないと考えられる。幹線道路沿いのため水田開拓は古い可能性があるが、大規模開拓はなされず、また水田地帯も形成されていなかったと言える。

3) スカラジャ西南部

集落番号 46 ~ 63 の集落は、東がスカラジャまで、西はスカブミの手前まで、北は幹線道路まで、南はチマンディリ川までの範囲に分布する。標高は 500 ~ 700 m の傾斜の緩やかな土地で、5 万図ではほぼ水田となっている。また標高 600 m 程の所に帯状に湧水が見られる。集落の大部分はスカラジャより西南に伸びる 5 万図上の道沿いに分布するが、この道は 1730 年以前の幹線道路に原型を持つと考えられる [Haan 1910-12: Vol. 2, 313]。集落規模は小さい。この道路沿いの最もスカラジャよりに人口 205 人の集落「砂糖椰子の水 (Tjikawoeng)」(番号 57) が存在するが、そのほかは 100 人台が 1、60 人台が 2、40 人以下が 9 である。ただし集落はほぼ小川や湧水のほとりに位置する。

その中で、北の幹線道路と南の道路の間にある集落番号 46 ~ 55 (49 を除く) の集落は、比較的新しい時期に入植が行われた可能性がある。5 万図ではこの一带は一面の水田であり、地図上の集落はほとんどが用水路のほとりにあるが、標高 700 m 台の一带には湧水が少なく、

10) スンダ語で茶碗を意味する単語は tjankir (19 世紀の綴り) であるので、この集落は外来の茶碗作り職人が集住したか、オランダ植民地権力によって茶碗作りを命じられた可能性が高い。

「人口統計」掲載集落はこの一帯には分布していない。「人口統計」掲載集落は、その南の標高600 m程の湧水が出るあたりに固まって分布している。集落規模は、1集落が人口141人を擁する他は60人台1, 50人台2, 30人台3, 20人台2であり、中核集落の周囲に小集落が集合している。また労役可能男子が労役可能女子より多い集落が2, 同数が2存在し、本郡の平均より男子の比率が高い。さらにこの一帯は、街道沿いで、かつ水田適地から水の少ない標高600～700 m地帯への開拓前線を形成しているので、下級首長が配下を引き連れて入植し、この首長の居住集落のまわりにこれに従う住民が居住したと推測される。

くわえて、南部の道路沿いの集落も、19世紀に入ってから入植の可能性が大きい。スカラジャに最も近い集落「砂糖椰子の水」以外は皆人口60人以下であり、この集落ともう一つの集落(番号60:28人)が労役可能女子より労役可能男子が多い一方で、一番遠い集落(番号63:37人)では戸数15に対して労役可能男子が7人であり、農業経営あるいは生活基盤の不安定さを示している。さらに集落「瓦(Genteng)」(番号62:59人)は、重量のある生産物の輸送の便宜からスカラジャ北部に飛び地となっていると推測されるが、瓦はウィルデの窯業の奨励とともにその統治期に現地人首長達の家の屋根材として普及したので、新しく形成された集落であると言える[Wilde 1830: 138, 210, 233]。なお旧幹線道路が通過していた一帯が新規入植の対象となったのは、ある時期に住民の逃散が起きたためと推測される[*ibid.*: 212]。

以上、この一帯はその大部分が19世紀初め頃に入植が行われ、いまだ安定した水田地帯となっていないと推測される。

4) スカラジャ南部

集落番号64～85までの集落は、スカラジャから西南へ伸びる道沿いのスカラジャ付近と、スカラジャから東南に伸びる道路からチマンディリ川沿いにかけてに分布する。この一帯の標高は500～600 mでありグデ山の比較的緩やかなスロープが続く。5万図では水田の他に竹林などが存在する。湧水は少なく、グデ山の標高800～1,000 mの急な斜面に端を発する4本の小川がこの一帯で複雑に分岐してチマンディリ川に注いでいる。所在判明集落はこの小川・用水路沿いとチマンディリ川沿いにある。集落規模は極めて大である。集落番号64はスカラジャ自身であり225人を擁する。スカラジャの意味はsoeka=好む, radja=王である。このほか200人以上の集落は622人1, 295人1, 100人台が7, その一方で40人以下はわずか2であった。所在不明集落は6とやや多いが、地図上に名称が明記されていない集落が多いので、不明集落が離散集落を意味するかどうかはわからない。

この一帯では19世紀に入ってから比較的大規模な灌漑工事や開発がなされたことが窺われる。622人という巨大人口をもつ集落「ガンダソリ(Gandasoelie: 植物の名)」(番号84)は用水路の分岐点のすぐ下流にあり、かつスカラジャ東南の盆地への入り口にも近く、交通の要衝

にある。人口600人以上の集落はチアンジュールレヘント統治地域に全部で10あるが、郡の中心集落でない事例は、本郡の1例とグデ山東南麓の2例のみであり、グデ山東南麓の2例は19世紀に入ってから灌漑工事と入植の結果成立した可能性が極めて高かった。さらに本郡の事例では、集落番号から判断するならば、「ガンダソリ」付近に集落「堰」（番号85:97人：所在不明）が存在すると考えられる。このほか灌漑に関わる集落名を見ると、この一帯には、「蛇行した川によって半島のようになった土地にある水田（Bodjong Sawah）」（番号78:54人）、および「池集落（Lemboer Siteo）」（番号79:79人）の名を持つ集落がある。後者は丘の南側に位置していて、少し離れた小川から用水を引く必要のある地形である。

さらに農業に関わる集落名として「天日干し場（Pamoijanan）」（番号70:295人）、「コショウ園（Kebon Pedas）」（番号73:192人）、宗教施設に関わるものとして「イスラム寄宿塾（Pasantren）」（番号76:100人：所在不明）、「チブラホル（Tjiboerahol: 中国人の偶像+水）」¹¹⁾（番号80:144人）、支配層に関わるものとして「標柱（または塔：Toegoe）」（番号69:74人）がある。このように他の集落や上級権力との関わりの中で意味をなす名称が多いが、中でも「コショウ園」はウィルデの開発奨励を想起させる。くわえてチアンジュール盆地底部チケトク郡でもイスラム宗教施設および中国寺院は、郡都から少し外れた古い開拓地帯に隣り合って存在していた [大橋 1998: 84]。

以上、この一帯はスカラジャから南海岸などへ続くルートに近く、かつ傾斜が緩やかであるので、小川のほたりなど水の便の良いところは比較的早くから開拓が進み、人口100人台の安定した集落が存在していたと考えられる。そしてその上に、19世紀初めに巨大な灌漑工事による急速な開発が行われた可能性が極めて大であるが、これを奨励し援助したのはおそらくウィルデであつたらう。

5) スカラジャ北部

集落番号86～100（あるいは103）の集落は、スカラジャより東、幹線道路より北のグデ山の急斜面に分布する。標高800～1,000mである。スカラジャより西の同標高のスロープと比較すると傾斜は緩く、小川が作る谷も深くない。5万図ではこの一帯のかなりの部分が水田である。またあまり多くはないが湧き水もあり、集落のほとんどはこれらの湧水に端を発する小川のほたりにある。高標高にも関わらず集落規模は比較的大きい。200人台が3、100人台が7、最も小さい集落でも58人であり、平均人口は130人となる。さらに1戸当たりの労役可能男子の数がグヌンパラン郡の他地域より多く、東南麓の安定した水田地帯と同じ傾向を示す。

11) boeraholはこの綴りならば果樹の名である。しかしこの名を持つ集落はグヌンパランに1、チマヒに2のみであること、所在地がいずれも道沿いの新開地であること、そしてチマヒの1集落名はBoerahol Kolot（もとboeraholがあった集落）であることから、中国人の偶像（berhala, brahala）と解釈した。

一方大規模な灌漑工事の跡は認められず、集落名も草木の名前がほとんどであるが、「大きな水がめ (Gentong)」(番号 94: 117 人) という、窯業を示す名称が一つある。また所在不明集落は 2 である。

この一帯は交通拠点スカラジャに近いので、その食料や労働力等の需要を満たすために、おそらく 18 世紀半ばから徐々に開拓され、1820 年代には水田地帯として比較的安定していたと考えられる。これに対して同じくスカラジャ近郊ではあるがスカラジャまでの登り道が物資供給の障害となる東南部(上述 1)と 4))は、スカラジャにコーヒーの買い取りのための小倉庫が配置されるなどして需要が増大した 19 世紀初頭以降、物資あるいは人員の供給地として植民地勢力にあらためて注目され、大規模灌漑工事が行われたものと解釈できる。

6) スカブミ北部

集落番号 101 (あるいは 104) ~ 145 までの集落は、上述スカラジャ北部の西側、幹線道路より北のグデ山急斜面の標高 600 ~ 900 m のところに分布する。斜面はスカラジャ北部よりやや急であり、湧水はあるものの、これより発する小川の浸食によって尾根と谷が形成されている。5 万匁ではなだらかな部分は水田となっているがその面積は少なく、周囲で焼畑が行われていた可能性がある [Wilde 1830: 205-206]。集落はほぼ小川のほとりにあるが概して小規模である。人口 100 人以上の集落はそれぞれ 101 人、100 人を擁する 2 集落があるのみで、過半の集落は 50 人以下である。東部の集落が相対的に大きめである一方で、西部では 70 人以上の集落は 3 のみであり、しかも 3 つともチマヒ郡との郡境に位置する。しかし 1828 年の時点で集落はだいたいにおいて安定していたと言える。所在不明集落は 6 で比率として少ないうえ、不明集落が集中している地点はない。戸数より労役可能男子数が少ない集落もない。くわえて郡都スカブミ (番号 1: 511 人) はこの地域の南縁の中央にあり、北半分のみとはいえ巨大な郡都の周りに小集落が散在する形態は、チアンジュール盆地底部のマレベル (Maleber) 郡に類似する。そこでこの地域は 19 世紀に入ってから、おそらくウィルデの奨励下で急速に開発されたと考えられる。

この一帯の 19 世紀初めの急速な開発は集落名からも考えられる。草木・自然地形を示す集落名が圧倒的多数を誇るものの、そのなかで集落「堰」(番号 143: 76 人) がスカブミを潤すかのごとくスカブミのすぐ北側にある。そのほか西部には「池集落」が 2 (番号 124, 141) 存在する。このうち 1 集落は所在不明であるが、集落番号から判断してチマヒとの郡境付近にあると考えて良いであろう。また西ジャワ北海岸の地名である「クラワン (Krawang)」(番号 136, 139: 39, 72 人), 「スバン (Soebang)」(番号 113: 101 人), チアンジュールレヘント統治地域南部辺境の地域名を含む「ジャンパン新村 (Babakan Djampang)」(番号 116: 46 人), スンダ語辞典の語彙にはないマレー語の「クラマツト (Kramat: 聖所)」(番号 123: 43 人) などは、外部

からの移住民の流入を想起させる。さらに労役可能女子より労役可能男子の方が多き集落が目立ち、1828年において開拓が進行中であった印象を受ける。

なお「ジャンパン新村」については、同名の集落がチマヒ、チチュルク郡に1つずつあり、それぞれ18世紀半ば頃に開拓の本格化した比較的古い水田地帯に位置している。その一方で1790年に成立したチフラン郡には存在しないので、「ジャンパン新村」は1780年代のコーヒー生産拡大開始期におけるジャンパンからの労働力動員と関係が深いと考えられる〔大橋 1997: 12〕。グヌンパランの「ジャンパン新村」については、スカブミを新郡都とした時点で移動させたか、スカブミの前身である集落「チコレ (Tjikolle)」付近にもとより存在したのかは不明である。

以上、この一帯は比較的新しい時期に急速に入植が行われた部分が多いと考えられる。その時期は19世紀に入ってから、なかでもウィルデの統治期の可能性が最も高いであろう。ただし開拓にあたり複数の集落に影響をあたえるような大規模灌漑工事は少数であったと考えられる。

7) スカブミ南部

集落番号146～174の集落は、幹線道路より南、スカブミの真南から西よりに散在する。東のスカラジャ南部および西のチマヒ郡に属す集落とは、使用する水系を別にしている。集落がややまとまって分布するのは、スカブミの南、チマンディリ川沿いの道沿い、およびチクンバル方面へのルートの分岐点である。スカブミ南部一帯は5万図ではほぼ水田であるが、湧き水は多くなく、複雑な用水路が目立つ。所在判明集落はいずれも小川・水路のほとりに位置しているが、集落規模は大変小さい。人口100人以上の集落はなく、80人台が2、70人台が3、その一方で40人以下が17を数える。不明集落は6である。

その中でスカブミの近郊に分布する番号146～155の集落は、組織的な入植が行われたが、農業基盤がやや不安定な状況にあったと考えられる。5万図ではこの地区に湧き水はなく、西半分ではスカブミから用水路が数本伸びるが、東半分に用水路は見られない。集落規模を見ると「ナンゲレン (Nangeleng: Nangelaeng ならば「山の高み」の意)」（番号151：所在不明）が人口87人であるほかは、1集落（番号153: 55人：所在不明）を除いて35人以下であり、小規模ながら集落に中心衛星の関係が見られる。ついで集落名を見ると、10集落中5がグヌンパラン郡東部に同名の集落を持ち、しかもその名称は他所ではまれにしか見られないものである。さらにこの10集落中5集落が所在不明であり、5万図上には名称が明記されていない集落もいくつか存在するものの、不明集落は番号150～154と続いている。くわえて所在判明集落のうち、戸数8に対して労役可能男子が2人と極端に数が少ない集落（番号148）がある。そこで「ナンゲレン」を中心に入植が行われたが、当時の技術では安定した用水の供給が難しかっ

たこと、そしておそらくスカブミ近郊で賦役貢納が過重であったことによって、農業経営が不安定となった可能性がある。

ところでこの開拓地の南側には、「上にある首長居住地 (Dayuhloehur)」(番号 168, 169, 170: 22, 34, 24 人) の名を持つ集落がある。丘の南側で、東に湧き水のある場所である。この集落は 18 世紀初めの交通の拠点チグヌングル (Tjigoenoenggoeroe) とほぼ同標高 (527 m) の、小川を隔てた対岸にあり、この付近を旧幹線道路が通っていた [Haan 1910-12: Vol. 2, 313]。さらに「上にある首長居住地」の南西には「グヌンパラン (Goenoengparang)」という、「人口統計」には掲載されないものの郡名の由来となった集落が 5 万図に載る。おそらくこの一帯は 18 世紀半ば頃までグデ山南麓の統治の中心地帯であったと推測される。しかし水田開拓について見ると、18 世紀半ばまでに開拓の可能性はあったとしても、1820 年代の状況には直接繋がらなかったようである。既に述べたようにスカブミ南部の集落規模は極めて小さく、集落名を見ると、そのほとんどが動植物・自然地形を示す中で、「グヌンパラン」付近に「広い野原 (Tegalaya ママ)」(番号 163: 53 人)、「堀立て小屋 (Balandongan)」(番号 157: 31 人) 等が見える。さらにわずか 2 集落であるが労役可能女子より労役可能男子が多い集落があることから、18 世紀末・19 世紀初め逃散が起きたのちに、再入植が行われたとも考えられる [Wilde 1830: 212]。

そして集落名から見るならば、この一帯の再入植はルートの防備を目的としていたと推測される。この一帯で多少とも灌漑に関わると推測される名称を持つ唯一の集落「池集落」(番号 166: 28 人) は、チクンバルへ向かうルート沿いの西端部にあり、また「要塞」(番号 172: 74 人) が幹線道路のチマヒ寄りに存在するのである。

以上、この一帯は 18 世紀前半の統治の中心であり、この時期に由来する集落名もあるものの、水田開発は 18 世紀前半から継続していた痕跡は認められない。18 世紀末・19 世紀初めに水田開拓が本格化した可能性は大きいですが、大規模灌漑工事は確認できず、この時期の開拓・入植は、スカブミ近郊を除いて、ルートあるいは境界防備の性格をもっていたと考えられる。

8) グヌンパラン郡まとめ

本郡では 1730 年代までの幹線道路は 5 万図上の道路より南を通っており、この旧道沿いに統治の中心があったので、その周辺で早期に水田が開拓された可能性がある。その後スカラジャが建設され、1740 年代に 5 万図上の幹線道路の原型となる北側の道路を使用してコーヒー輸送が開始されると、スカラジャ北部が食糧・人員の供給地として開拓され、スカラジャ南部も 18 世紀末までに幾分か開拓されたと推測される。19 世紀に入ると、1813 年頃のスカブミ建設とともにスカブミ北部の開拓が進み、スカブミ南部でも入植と開拓が試みられたが、南部では開拓の失敗もあったようである。この時期にはさらにスカラジャ南部で大規模灌漑工事と入

植が行われたが、これらはおそらくウィルデが主導したと考えられる。

3. チマヒ郡

「人口統計」掲載集落でチマヒ郡に分類される 101 集落中、74 の所在を確認し得た。所在判明集落は、グヌンパラン郡の西側のグデ山スロープ上と、南部の小盆地の中に分布する（地図 2-1 参照）。グヌンパラン郡との境界は、幹線道路以北では 5 万図上の道路であり、グヌンパラン郡の南部、および西のチフラン郡の集落とは未開拓地を挟んで利用する水系を異にしている。1 集落当たりの平均人口は 66 人でチアンジュールレヘント統治地域 20 郡中 18 位である。

1) 幹線道路の北部

集落番号 1～40 の集落は幹線道路以北のグデ山の急なスロープの上に分布する。標高は 580～900 m である。この一帯はグヌンパラン郡のスカブミ北部とほぼ同様の地形であるが、小川の作る谷はグヌンパラン郡の谷より浅い。なだらかなスロープ部分は、5 万図ではほぼ一面の水田である。用水路も存在するが、さほど複雑ではなく、20 世紀初めでもむしろ小川そのものが利用されている。所在判明集落のすべてがこれらの小川のほとりに存在し、本郡の人口 100 人以上の集落 16 のうち 11 がこの一帯に存在する。所在不明集落は 12 と多く、なかでも番号 33～39 は固まって所在不明であるが、これらは 5 万図のチサアト (Tjisaat) 市街地に飲み込まれたと考えられる。

幹線道路の北部のうちグヌンパラン郡との郡境付近は、大規模灌漑工事によって比較的新しく開拓された地域であると考えられる。この一帯の中心集落は「人口統計」で郡都として郡中最大の人口を擁する「スカサリ (Soekasari)」(番号 1: 314 人) であるが、5 万図上では標高 750 m 程のところからスカサリに至る長い水路の分岐点が認められ、さらに集落「用水路取水口 (Soengapan)」(番号 27: 73 人) が、所在不明であるものの、番号から判断して最大人口を擁する集落「スカサリ」の上流にあったと考えられる。くわえて、既述のように「スカ (Soeka)」の付く集落名は、この時期のプリアンガン地方では現地人支配層あるいは植民地権力によって建設された集落であることが多いことから、スカサリは、上流の大規模灌漑工事とともに現地人支配層あるいは植民地権力が 19 世紀初め以降に建設した可能性が高い。そしておそらくこの時期に、スカサリ周辺の集落「中国人の偶像 (Barahol)」(番号 13: 45 人)、「東の大きい水がめ (Gentong Wetan)」(番号 31: 50 人)、「西の大きい水がめ (Gentong Koelon)」(番号 32: 58 人) が成立したと考えられる。

一方チサアト市街地に存在したと考えられる所在不明集落 33～39 は幹線道路沿いにあったこと、所在不明集落の名称には「むかし中国人の偶像のあった集落 (Boerahol Kolot)」(番号 33: 40 人) が含まれることから、比較的早期に成立していた可能性がある。しかし上述 3 集落に

チサアト市街地に飲み込まれたと考えられる所在不明集落を加えた10集落の人口は最大が77人、以下60人台2、50人台5と小規模で、戸数より労働可能男子が少ない集落はなく、労役可能女子より労役可能男子が多い集落が4（うち所在不明集落3）存在した。さらに5万匁ではスカサリ方面からチサアト市街地へ2～3本用水路が伸びているので、この一帯の本格的な水田開拓の開始もスカサリ同様、19世紀初頭以降であったと考えられる。

くわえてグヌンパラン郡では窯業と宗教施設の集落名が灌漑施設とともにセットで存在する一帯は、ウィルデの統治期に開拓された可能性が高かったので、本郡グヌンパラン郡境付近の開拓は、ウィルデの統治期に本格化したと推測される。

これに対してスカサリより西部の標高550～700mの比較的緩やかなスロープの一帯は、大規模灌漑工事の痕跡が見られない一方で、人口100人台の集落が5存在する。所在不明集落は2であり、1集落当たりの人口も郡の平均66人に対して78人と大きい。おそらく小規模な開拓が積み重ねられて、1820年代後半には安定した水田地帯を形成していたと思われる。集落名を見ると、その多くが動植物・自然地形の名称である中で「城壁で囲まれた集落(Koeta)」（番号16: 93人）、「ジャンパン新村(Babakan Djanpang)」（番号15: 105人）、「立ち寄り所(Panijndangan)」（番号19: 40人）といった、統治に関わる名称を持つ集落がある。この一帯は、18世紀初めからの交通拠点であり郡名ともなっている集落チマヒ(番号7: 224人)の上流にあたり、交通拠点に必要な食糧や物資、あるいは人員を供給していたと思われる。なおこの一帯の集落では、労役可能女子に対して労役可能男子が他地域より少な目であり、また戸数により労役可能男子数が少ない集落が4存在するが、これは現在のところ賦役貢納の重さのためであると推測される。

2) 幹線道路の南部

集落番号40～83の集落は、幹線道路より南の標高520～580mの一帯で、南側の山地までの南北3～4kmの一帯に分布する。この一帯は新しい開拓地の可能性が大きい。第1に水利を見ると、5万匁では起伏の少ない部分は一面の水田であるが、湧き水は無く、幹線道路より北部から小川・用水路が何本も引かれている。所在判明集落はすべてこの用水路のほとりにある。集落規模は、「ラムバイ(Ramby:「下垂」の意味か)」（番号43: 212人）、「場所の定まった、城壁を持つ集落(Koetamanéh)」（番号67: 130人）、「干上がった水(Tjisaat)」（番号66: 178人）、「ボジョロンロア(Bodjong Lowa: Loaは木の一種)」（番号45: 110人: 所在不明)のほかは100人以下である。人口100人以上で所在が判明した3集落はみな小川のある東部に存在した。

第2に集落名を見ると、支配層・植民地勢力との関わりの中で意味を持つ名称が多い。「スカマントリ(Soekamantrie: 好む+役人)」（番号44: 89人）はスカサリと同様に支配層によって建

設され、支配層の職田か、彼らが何らかの特別な徴税権を持っていたと考えられる。「カラデナン (Karadenan)」(番号 81: 84 人) は「ラデンの称号を持つ貴族の居住地」という意味をもつが、郡内居住の下級首長でラデン称号を持つ者は郡長のみであり、当時郡長は郡都に居住していたので [大橋 1993: 34-35]、郡長がこの集落に対し特別な徴税権を持っていた可能性が大である。そのほか「レヘントの馬の飼育所 (Bentjoj)」(番号 53: 76 人: 所在不明)、「ドリアン集荷地 (Padoerenan)」(番号 60: 52 人) などの集落名があるが、後者はウィルデの農業奨励を想起させる。また「ラムバイ」はウィルデがそこにあった複数の学校——おそらくイスラム宗教学校——を改修した集落であった [Wilde 1830: 209]。

その一方で、戸数より労役可能男子の少ない集落数は、本郡全体が他の 3 郡より多いなかでも 15 と目立つ。くわえて労役可能男女に対する子供の数が通常の比率 (1 対 1) より大きい集落が多い。5 万匁では名称が明記されていない集落がさほど多くないにも関わらず所在不明集落は 13 にのぼり、なかでも集落番号 49 ~ 61 の集落は 13 中 7 が不明であった。この一帯の集落がやや安定性に欠けていたことが窺われる。

以上、この一帯は幹線道路に近いので、18 世紀にも多少の開拓はなされていたと推測されるが、大規模な灌漑工事を伴う開拓は 19 世紀に入ってからと考えられる。集落の不安定性の原因は、現在のところ灌漑用水が十分でないこと、および収奪が厳しかったことが考えられる。

3) 南部小盆地

集落番号 84 ~ 101 の集落は、南側の山塊中にある盆地の底部からチチャティ (Tjitjatih) 方面への山中を通るルート上に点在している。所在判明集落は小川のほとりと山脚部に存在する。集落規模は集落チマヒに最も近い「チチャンタヤン (Tjitjantajan: 神の場所+水)」(番号 84: 194 人) 以外は皆人口 100 人以下であり、90 人台の集落が 2、ついで 50 人台が 2 と概して小さい。5 万匁では盆地底部にのみ水田があり、所在判明集落のなかでも周囲に水田が存在しない集落が多い。また大規模灌漑工事の痕跡は認められない。判断材料は乏しいが、この一帯の入植は比較的新しい可能性がある。第 1 に上述のようにこの集落群は中核衛星型を示している。第 2 に集落名を見ると「神の場所 (Tjantajan)」はスダ語の語彙になくジャワ語で理解できる単語である。さらにその付近にスダ語化したアラビア語で「追求 (Talahab)」(番号 94: 35 人: 所在不明) の名を持つ集落があり、何らかの宗教施設が存在したと考えられる。第 1 章で述べたようにウィルデは統治にイスラム教を利用したので、この一帯の入植の時期はウィルデ統治期の可能性もある。ただし入植時期が 19 世紀初めであるとしても、開拓の重点地域ではなかったと言える。

4) チマヒまとめ

集落チマヒは交通拠点であったので、18 世紀半ばよりその周辺と北部の開拓条件の良いとこ

ろが、順次水田化されたと推測される。その後19世紀に入って、灌漑用水の不足している幹線道路南側とグヌンパララン郡境で、比較的規模の大きい灌漑工事をともなった開拓がなされた。しかし幹線道路南部は必ずしも安定した水田地帯とはならなかったようである。

なお本稿対象4郡中チマヒ郡は、米穀貢納者中の水田耕作者の比率が比較的高いがこれはおそらく、1) 地形、すなわち水田化し得るなだらかなスロープが比較的大きな面積を占めること、2) 小川の水量がやや豊富であったことに関係すると考えられる。その一方で本郡では、コーヒー生産がさほど重要視されていないにも関わらず、住民の生活の不安定さが窺われた。この理由の解明は今後の課題であるが、灌漑用水が不十分な場所以外では、さしあたり輸送、道路維持、物資の供給など収奪の厳しさが考えられる。

4. チフラン郡

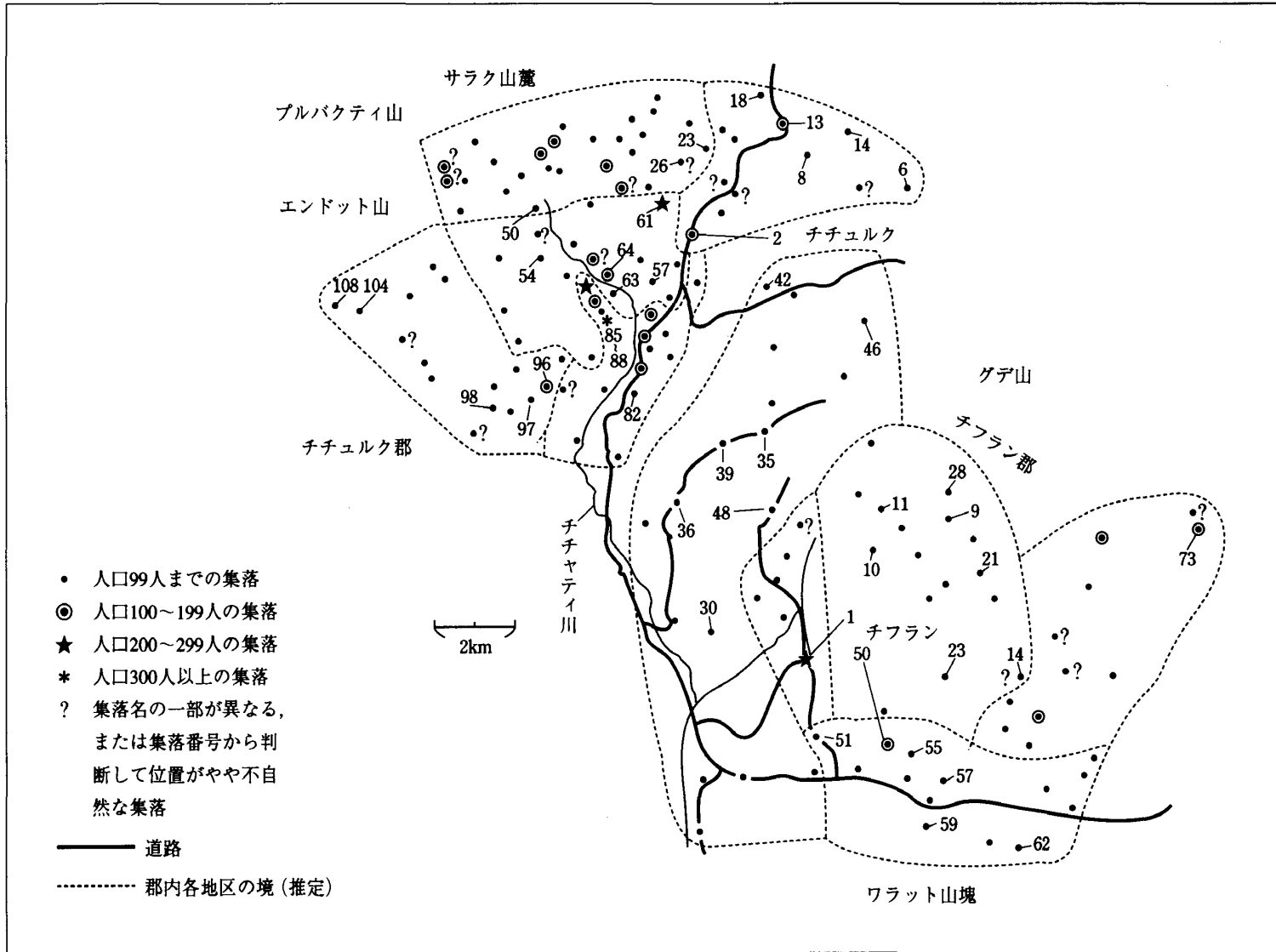
「人口統計」掲載集落でチフラン郡に属す79集落中、65の所在が判明した。判明集落は、チマヒ郡の西側のグデ山南麓から西南麓にかけて分布する（地図2-2参照）。5万図ではチマヒ郡とは道路で区切られ、利用する水系も別である。南はワラット（Walat）山塊、西はチチャティ（Tjitjatih）川がおおよそその郡境である。1集落当たりの平均人口は40人でチアンジュール-レヘント統治地域20郡中最下位である。

1) 郡都周辺

集落番号1～8までの集落は、郡都「瘦せた土地（Nagrak）」（番号1:201人）から南へグデ山のスロープを登るルート周辺に存在する。標高は500m程である。5万図ではこの一帯は小川が少なく、郡都の下流では水路が複雑に分岐しているうえ、郡都北側で小川から郡都方面へ分水されている。おそらくチマヒ郡の郡都スカサリと同様に、水の少ない荒れ地を灌漑して、新たな郡都を建設したのであろう。この一帯の集落は郡都を除いて人口40人以下である一方で、集落名に「掘られた溝（Parigi）」（番号8:23人：所在不明）があり、大規模灌漑工事がなされた可能性がある。ただし所在不明集落は3あり、集落の安定性はいま一つであったようである。本格的開拓の開始期は、この郡が1790年に成立したこと、およびウィルデの統治期に開拓された地域によく見られる集落名がないことから、18世紀末から19世紀初めの可能性が高い。この一帯の開拓の目的は不明であるが、現在のところ最も可能性が高いのは、この一帯より標高が低く、かつ水田地帯を持たないチチュルク寄りの幹線道路への物資・人員供給である。

2) グデ山西南のスロープ

集落番号9～29の集落は、グデ山西南麓の標高530～630mの緩やかなスロープ上に分布する。5万図では、起伏が緩やかなところには水田が認められるが、小川は少なく湧水はない。



地図2-2 チフラン郡とチチュルク郡

プリアンガン地方では、概して高山の西側は湧水・小川が少ない。5万図ではこの一帯に1本の用水路が確認できるが、「人口統計」掲載集落はその周辺に分布せず、後代に開削された水路であると考えられる。しかし水田耕作の適地とは言えないこの一帯の所在不明集落は4であり、比較的安定した集落群を形成していたと言える。

この一帯には、ジャワ人が入植した可能性がある。集落規模を見ると「砂糖椰子の水 (Tjika-woeng)」(番号9)の74人が最大であり、ついで50人台の集落(番号28)が1つある。そのほかは皆50人以下であり、小規模ながら中核衛星の関係が見られる。また労役可能男子が労役可能女子より多い集落は5あり、1820年代末にも入植が進展していると考えられる一方で、戸数(6戸)に対し労役可能男子(5人)が少ない集落が一つ存在した。集落名を検討すると、中心集落「砂糖椰子の水」は小川のほとりにあり5万図では水田に囲まれている。その近隣には「ジャワ山 (Goenoeng Jawa)」(番号10:37人)があり、その北に「隠れ家 (Panjoesoehan)」(番号23:23人)、東には「チマンデ (Tjimande: 店+水)」(番号21:16人)があるが、panjoesoehan, mandeはジャワ語であり、スダ語辞典にはない語彙である。さらに砂糖椰子に関する集落名がもう一つある (Bodjongkawong: 番号23:35人) こと、およびこの一帯の地形が水田開拓に適さないことから判断して、この一帯の入植の目的は椰子砂糖生産であったと考えられる。

このほかこの一帯の集落名には「立ち寄り場所」(番号11:23人)「指標柱」(番号14:23人)といったチマヒ郡北部に見える名称がある一方で、ウィルデの統治期に本格的開拓が始まったと考えられる一帯に現れる、窯業や宗教施設を名称とする集落が存在しないので、入植開始期は18世紀後半以降、なかでも18世紀末から19世紀初めにかけての可能性が高い。

3) チチャティ川東岸の道

集落番号30～48(または49)の集落は、チチャティ川東岸の丘陵部の道路沿いに南北に分布する。標高は450m前後である。5万図では森林地帯であり、水田は集落の周りに多少認められる程度である。小川も確認できない。集落規模は小さく、人口51人の集落が(番号35)最大である一方で、30人以下は9集落ある。所在不明集落は2あるものの、労役可能男子が労役可能女子より多い集落が6存在し、1820年代後半も入植が進展していたと考えられる。

集落名を見ると、灌漑・水田に関する名称がない一方で、「竹の露店 (Waroeng Gombong)」(番号36:32人)、「瓦 (Genteng)」(番号46:30人)、イスラム教宗教施設の存在が推測される「チロハニ (Tjirohani: 霊+水)」(番号48:27人)、そして最もバイテンゾルフ寄りに、「製糖工場 (Pangoelaan)」(番号42:18人)が認められる。そこでこの一帯もまた椰子砂糖生産地帯であり、集落名のコンビネーションから入植期はウィルデの統治期の可能性が高い。

4) グデ山とワラット山塊鞍部

集落番号 50～65 の集落は、グデ山とワラット山の鞍部の標高 460～500 m に帯状に分布する。5 万図では、起伏の少ない部分は一面の水田であるが、湧き水・小川はなく、グデ山の急斜面に端を発する小川から長い用水路が引かれ、この一帯でやや複雑に分岐している。集落はみな用水路のほとりにあり、所在不明集落はない。この一帯は地形に加えて、以下に述べる集落のあり方がチマヒ郡の幹線道路の南部と類似しており、開拓は比較的新しいと考えられる。

この一帯の中心集落は、集落名が郡名ともなった「チフラン (Tjiheulang: 蔓草の一種+水)」(番号 50: 151 人) である。この集落は 18 世紀初めより交通の拠点であり、1806 年には集落スカラジャ・チチュルクとともに住民よりコーヒーを買い付けるための小倉庫が建設された。しかしそのほかの集落規模は小さく、50 人台・40 人台の集落がそれぞれ 2 あるのみである。また所在不明集落は 2 である一方で、労役可能男子が労役可能女子より多い集落は 6 あり、1820 年代においても開拓が進展していたと考えられる。

集落名を見ると、「水田集落 (Lemboer Sawa)」(番号 55: 40 人)、「薬あるいは焼畑の集落 (Lemboer Jamie)」(番号 57: 22 人) といった稲作に関する地名が見える。また「カラデナン (Karadenan)」(番号 62: 14 人)、「カマンドラン (Kamandoran: 下級首長マンドールの居住地)」(番号 51: 27 人) といった、下級首長が徴税権を有すると考えられる名称、さらに「瓦 (Genteng)」(番号 59: 38 人) がある。

そこでこの一帯は、18 世紀初めより交通の拠点であったため、早くから多少の水田が開発された可能性があるが、集落チフランの需要を満たすために、19 世紀に本格的に開拓された可能性が高い。またチマヒ郡の幹線道路南部と比較した場合、集落規模はより小さく、労役可能女子に対する労役可能男子の比率は高く、また戸数より労役可能男子が少ない集落もないので、チマヒ郡より新しい開拓地であり、いまだ厳しい収奪が行われていないと推測される。

5) グデ山南麓

集落番号 66～79 の集落は、グデ山南側のスロープの標高 540～850 m にあり、チマヒ郡の集落分布地域に隣接している。地形はチマヒ郡に似るが、小川が少なく起伏が多い。5 万図では起伏の少ない一帯は一面の水田であり、用水路が複雑に分岐している。しかし用水路沿いには「人口統計」掲載集落はなく、所在判明集落はそのほとんどが小川沿いにある。また 5 万図上には、「人口統計」掲載集落の 2 倍以上の集落が散在し、「新村」など新開地を示す名称が多い。そこで 1820 年代までにはいまだ灌漑の難しくない条件の良い土地のみが開拓されていたと考えられる。この一帯の「人口統計」掲載集落の規模は、平均人口 66 人と比較的大きく、100 人以上の集落が 3 ある一方で、40 人以下の集落は 2 のみである。所在不明集落は 4、労役可能男子が労役可能女子より多い集落が 4 ある。また集落名を見ると、動植物・地形が大半を占め

るなかに標高 600～900 m の高い一帯に「上流チフラン (Tjiheulang Girang)」(番号 73: 111 人)、そして現地人支配層の狩り場であったと考えられる「ボジョンラン (Bodjonglarang)」(番号 74: 43 人：所在不明) があり、集落チフラン居住の支配層との関係が考えられる。

そこでこの一帯は、交通拠点チフランに物資を供給するために、18 世紀半ばの比較的早い時期から徐々に水田開拓が進んだ地域であり、かつ 1820 年代にも開拓が進行中であったと考えられる。

6) チフランまとめ

チフラン郡では、18 世紀半ば頃から集落チフラン北東部のグデ山南麓、そしておそらく西南麓のスロープへの入植が始まった。ついで 18 世紀末から 19 世紀初めに郡都ナグラック付近が大規模灌漑工事とともに開拓され、19 世紀に入っておそらくウィルデの統治期に集落チフラン周辺の灌漑工事と水田化およびグデ山西南麓丘陵への入植が行われたと考えられる。ただしグデ山西南麓への入植は、必ずしも水田化を伴わず、焼畑・陸田による食糧生産と椰子砂糖生産が行われたと考えられる。また郡の西部はルート沿いに集落が点在しており、開拓の面的展開は見られない。

ところで、チフラン郡はチマヒ郡とチチュルク郡の一部をあわせて 1790 年に成立したが、この郡の東部と西部は土地利用、生産物が異なり、農業的観点からは郡編成の必然が感じられない。おそらくこの編成はコーヒー輸送上の必要であったと考えられる。集落チフランは 1806 年にコーヒー買い取りの小倉庫が置かれたように、コーヒー輸送の重要な拠点であった。その一方で既に述べたように、郡都ナグラックからチチュルク盆地底部までは道がやや陰しくまた物資・人員の供給が可能な水田耕作適地がなかった。そこでチフラン郡に郡都チフランからチチュルク盆地にいたる幹線道路への物資・人員供給と、椰子砂糖生産の役割を期待したと考えられる。

一方、本郡がコーヒー生産をさほど期待されない理由は明確ではないが、政策的にはウィルデが本郡を椰子砂糖や果物の生産拠点に特化させたのち、オランダ政庁もこの方針を継続させた可能性が最も大きい。第 I 章第 3 節で述べたように、砂糖椰子の樹液は、通年採取可能である一方でさほど日持ちがしないので、雨季乾季に関わらず煮詰めて加工しては市場に運ぶ必要がある。そこで道の悪い雨季でも頻繁に輸送しなければならない産物をバイテンゾルフ・バタバに近い場所で生産させたと考えられる。

5. チチュルク郡

「人口統計」掲載集落でチチュルク郡に属す 111 集落中、87 の所在が判明した。所在判明集落は、大部分がチチャティ川の西岸、サラク (Salak) 山の東南麓のチチュルク盆地底部に分布す

る。ただしチチュルク盆地底部でチアンジュール-バイテンゾルフ間の幹線道路がチチャティ東岸を走っているところではチチャティ東岸に若干の集落が分布する。このほか本郡に属す集落は盆地西南のエンドット (Endoet) 山麓にも分布する (地図 2-2 参照)。1 集落当たりの平均人口は 75 人であり、チアンジュール-レヘント統治地域 20 郡の中で 15 位であった。

1) グデー-サラク山鞍部

集落番号 1～19 の集落は、グデ山とサラク山の鞍部、および集落チチュルクより北の幹線道路沿いに分布する。標高は 500～600 m である。この一帯は 5 万図では水田はわずかであり、小川は小規模ながら谷を刻んでいる。竹林、果樹などの有用樹、雑木林が卓越した地域である。

集落規模を見ると、郡都である「委員の居住集落 (Pakoemitan)」(番号 1: 608 人) が最も大きい。この集落の所在は不明であるが、おそらく集落チチュルク (落ちる水、滝) のやや北の道路沿いに存在し、5 万図ではチチュルク市街地に飲み込まれていると考えられる。人口 100 人以上の集落はこのほか幹線道路沿いに「チチュルク」(番号 2: 168 人)、「ベンダ (Benda: 樹木の名前)」(番号 13: 102 人) がある。

この一帯には労役可能女子に比べて労役可能男子の多い集落が 9 あるが、これは水田開拓が進行中であることを示しているというよりは、むしろ輸送や手工業・商業が盛んであるがゆえの男子の集中であると考えられる。集落名を見ると、動植物名・自然地形名に混じって、「境界 (Wates: ただしスダ語辞典の語彙になし)」(番号 14: 52 人)、「要塞」(番号 18: 27 人)、「マンガスティン (Manggis)」(番号 8: 53 人)、スダ語で壁材にする竹製マットを意味する bilik を含む集落名 (番号 6, 7: 人口 37, 70 人: 7 は所在不明)¹²⁾ などがある。この一帯はおそらく、水田稲作よりは産物輸送、果物栽培、竹細工などで生計を立てる居住者が多かったと考えられる。なお所在不明集落は 4、戸数より労役可能男子が少ない集落は 1 であるが、水田耕作従事者が少ないと考えられる割には、安定していたと言ってよからう。

2) サラク山脚部

集落番号 20～52 の集落は、サラク山の山脚部に分布する。標高は 530～650 m である。5 万図では山脚部より南は一面の水田である。またこれらの集落は、そのほとんどがサラク山の急なスロープに端を発する数本の小川のほとりに存在する。集落規模を見ると、人口 200 人を越える集落はないものの 100 人台が 10 存在する。所在不明集落は 5、1 戸当たりの労役可能男子数は平均 1.5 人であり、これらの数値からは安定した水田地帯である印象を受ける。

集落名を見ると、水田に関する「水田地帯 (Pasawahan)」(番号 23, 26: 87, 91 人) と「古い

12) 「人口統計」では、Tjibibik と綴られているが、1) bibik という単語はスダ語に意味が無く、マレー語では bibi (叔母) と同意義であること、2) 5 万図に Tjibilik という集落名があることから、「人口統計」の綴り違いと判断した。

水田地帯 (Pasawahan Toa)」(番号 22: 125 人: 所在不明) が最もバイテンゾルフ寄りにあるが、この集落名は、現地人支配層が灌漑工事あるいは開田した可能性を示す [Haan 1910-12: Vol. 4, 443, 447, 448]。そのほかの地名はスンダ語で動植物、自然地形をあらわすものが多いが、そのなかで山脚部からやや底部中央寄りに「ジャンパン新村」(番号 50: 56 人) がある。

この一帯は、おそらく 18 世紀半ばから山脚部の水の便が良いところで徐々に開拓が始まり、18 世紀末頃までに、現地人支配層が「古い水田地帯」付近を開拓したと考えられる。労役可能女子に対して男子が多い集落が 6 あるが、このうち「水田地帯」(番号 23) については統計の不備 (女子数過少)、その他についてははまだ開拓進行中の可能性が考えられる。その一方で戸数より労役可能男子数が少ない集落が 3 あるが、集落名を見るとこのうち 2 集落が「古い水田地帯」(番号 22), 「水田地帯」(番号 26) であり、原因として過重な賦役貢納の負担が考えられる。

3) 盆地底部中央部

集落番号 53 ~ 69 の集落は、上述の「ジャンパン新村」から幹線道路まで東南方向へ盆地底部に帯状に分布している。標高は 500 ~ 550 m ほどである。この一帯は 5 万匁では一面の水田で小川が数本流れ、一部で用水路網が発達している。所在判明集落は皆この小川や用水路網のほとり、またはその近隣に存在する。

集落規模を見ると、「バンバヤン (Bangbayang: 意味不明)」¹³⁾ (番号 61: 256 人) が圧倒的の大きさを誇るが、位置的には独り北西にはずれている。人口 100 人台の集落は「バナナ集荷場 (Papisangan)」(番号 64: 112 人) のみである一方で、40 人以下の集落が 5 ある。労役可能女子に対し男子が多い集落は 5、所在不明集落は 4 であり、比較的新しい時期に開拓された印象をうける。ただし各集落は拡散して存在し依拠する水系もバラバラで、中核衛星型分布とは言えない。

この一帯が比較的新しい開拓地である可能性は、集落名からも窺われる。集落名の多くはスンダ語の動植物名、自然地形であるが、「バナナ集荷場」が 3 存在する。本来スンダ語でバナナは cau であるがマレー語の pisang が使用され、かつ用水路の分岐点に近いので、これらの集落はバイテンゾルフ方面へ輸送されるバナナの現地集荷地点の役割を与えられた可能性がある。このほか「新村」のつく集落名は「ジャンパン新村」(番号 54: 49 人) のほか、「パリ新村 (Babakan Pari: 魚または果樹の一種)」(番号 57, 63: 31, 87 人) が 2 ある。しかも後二者は用水路の分岐点付近にあり、灌漑工事とともに成立したと推測される。

以上、この一帯の開拓開始期はサラク山脚部より遅いと考えられるが、正確な時期は不明である。比較的規模の大きい灌漑工事が見られるので、19 世紀に入ってから開拓が始まった可能

13) この語の正確な意味は不明であるが、Bangbaijang, Baijabang という集落名は、峠の麓や川の渡し場にしばしば見られ、当時は交通・輸送の拠点に関する意味があったと考えられる。

性が高く、さらに集落名から推測してウィルデの統治期に本格化した可能性もある。

4) 幹線道路周辺——南部

集落番号 70～95 の集落は、チチュルク郡中央から南より幹線道路周辺に分布する。標高は 450～470 m である。所在判明集落 18 のうち 10 が道沿いにある。5 万図ではチチャティ川西岸はほぼ水田であり小川も多いが、東岸は果樹園、竹林などであり、小川・湧水はない。

この一帯の集落規模は比較的大きく、人口 100 人台が 9 存在する。なかでも幹線道路から西に 1.5 km ほどの「カソの東屋 (Pondok Kasso: 東屋+草の名称)」と名づけられた 4 集落 (番号 85～88) のうち 3 つは巨大で、番号順に 232, 198, 57, 319 人の人口を擁している。この 4 集落の分布地域は、上述の 3) で説明した用水路の分岐点付近であり、集落番号の近い幹線道路沿いの集落に米穀を供給するために開発されたと考えられる。この 4 集落も含めてこの一帯では、労役可能女子より男子が多い集落が 10 あり、一方戸数より労役可能男子が少ない集落が 1 存在する。なお所在不明集落 6 のうち 4 が番号 90 番台に集中しているが、これは 5 万図の該当地区で名称が明記されていない集落が多いことによると考えられる。

集落名を見ると、スンダ語の動植物・自然地形名称のほかは「露店 (Waroeng)」を含む名称が 2、マレー語で北を意味する utara を含む名称、さらに「砂糖工場 (Pangoelaan)」が存在する。ただし「砂糖工場」(番号 82: 36 人) はチチャティ川東岸にあり、ルートから考えてチフラン郡産出の椰子砂糖液を加工した可能性が極めて大である。

この一帯の集落は、幹線道路沿いではこの道路を原因とした人口の集中により大規模化し、道路からはずれた盆地底部では米穀生産のための開拓によって大規模化したと考えられる。後者は、比較的大規模な灌漑工事の存在から 18 世紀末から 19 世紀初めにかけて開拓されたと考えられる。

5) プルバクティ (Perbakti)・エンドット山のスロープ

集落番号 96～111 の集落は、プルバクティおよびエンドット山の鞍部へと向かうルート沿いに点在する。標高は 500～600 m である。この一帯は 5 万図ではやや起伏の多い傾斜地で、水田は地表の 60～70% を占め、あとは保護林、竹林、果樹などが目立つ。所在判明集落はみな小川や用水のほとりにある。集落規模は小さく、人口 100 人以上の集落は、最も東よりの「ボジョン・ドリアン (Bodjong Duren)」(番号 96: 143 人) のみであり、人口 99～50 人の集落も 4 のみである。所在不明集落は 2、労役可能女子より男子の多い集落は 5 である。集落名を見るとこの一帯の西端、5 万図でエンドット山南麓の水田が広がる一帯の上流部に、灌漑に関する名称「サラクの堰 (Prakan Salak)」(番号 106, 108: 35, 66 人) が 2 存在する。しかしそのほかは、コーヒーを含む集落名称 (番号 97: 18 人)、「出小屋 (Balandongan)」(番号 98: 37 人) を除くならばスンダ語の動植物・自然地形を名称としている。

この一帯は、おそらく18世紀末からウィルデの統治期までに入植が行われ、1820年代後半にあっても開拓は進行中であったと考えられる。特に西端は19世紀に入ってから灌漑工事とともに開拓された可能性が高い。

6) チチュルク郡まとめ

本郡では、18世紀半ば頃からサラク山脚部の水の得やすい場所で小規模な開拓が開始されたのち、18世紀末頃、バイテンゾルフに近い幹線道路周辺で支配層が開拓を行ったと考えられる。その後19世紀に入って盆地底部中央部とエンドット山麓で、灌漑工事とともに開田入植が行われたと考えられる。

ところで、1821年にスカブミの行政官は、チチュルク郡では他郡に比して焼畑が多く、耕地も人も安定せず、集落はわずか2～3戸で形成されていると報告している。彼はさらに、この郡では水田開拓のための前貸し制度が住民のために用意されているにも関わらず住民は開田しない、とまで言う [Haan 1910-12: Vol. 4, 507]。たしかに1813年にはチチュルク郡の半分が焼畑地帯であるという報告があるもの [ibid.: Vol. 4, 444]、本節の検討によるならばチチュルク郡は、1820年代末の本稿対象地域中で開拓の遅れが顕著な郡とは言い難い。しかもチチュルク郡の開拓が、1821年まで進まずそれ以降急速に進んだという痕跡も見られない。そこで上述の行政官の発言は、彼が植民地権力の支配拠点でありながら水の便の悪い幹線道路沿いの状態以外を知らないか、あるいは幹線道路沿いで水田化を進めたいにも関わらず、という前提にたってなされたものであると考えられる。

また、バイテンゾルフに至近であるにも関わらず、本郡でのコーヒー生産が期待されなかった理由の仔細は不明であるが、ウィルデを中心とする植民地勢力が、この郡に、チアンジュール方面からの幹線ルートとインド洋からのルートが合流する輸送拠点としての役割、および、日持ちがせず1年中輸送しなければならないバナナなどのバイテンゾルフへの供給を期待した可能性が高い。

6. 小結

本稿対象地域の水田開拓の順序をまとめると、まず、18世紀半ばから幹線道路の拠点集落付近で小規模な開拓が始まったが、この時期に集落グヌンパラン付近にも水田が存在した可能性がある。ついで18世紀末までに、輸送拠点である集落スカラジャ、チマヒ、チフランの上流部分および、チチュルク郡のサラク山脚部、その後18世紀末～19世紀初めにチフラン郡の郡都付近の開拓と椰子砂糖生産を目的としたグデ山麓で入植が行われたと考えられる。そして1810年頃より大規模灌漑工事を伴った開拓が、グヌンパラン郡のチプリアンガン、ガンダソリ、グデ山北部、チマヒ郡の郡都付近および幹線道路南側、チフラン郡の幹線道路南側、チチュルク

盆地底部などで広範に展開されたほか、辺境防備のための入植も行われたと考えられる。

以上、本章の作業は今後、現地調査を含めた様々な方法で実証する必要があるが、「おわりに」において今少し暫定的な考察を進めたい。

おわりに

本稿では、「はじめに」で筆者の問題関心を述べたのち、近年継続してきた、ホードレイの18世紀半ば封建的生産様式成立説に対する実証レベルでの批判を続行した。その結果、本稿対象地域においても耕作者による耕地所有、植民地勢力による灌漑施設建設・金融など、ホードレイの主張とは異なる事象が一般的であることを示し得た。本稿はホードレイの研究とは異なり1810/20年代を中心として実態を明らかにするものであるものの、以上の事象はそのまま18世紀半ばに封建的生産様式の成立を説く有効性を問うことになろう。

さらに当時のプリアンガン地方の社会を考える上で、コーヒー栽培は不可欠な要素であることは間違いないが、本論の結論をチアンジュール盆地開拓試論 [大橋 1998] と比較すると、以下に示すように、コーヒー栽培以外の諸要素を考察の視野に入れることが今後重要な課題となると考えられる。

1) 本稿の作業から輸送力増強を目的とした水田開発の可能性が認められる。本稿対象4郡はチアンジュール盆地に比べて、なだらかなスロープや水源に恵まれているとは言えず、開拓条件の良いところは少ない。開拓の特徴として輸送拠点の周辺での水田化が顕著であるが、1730年以降に建設された集落スカラジャ、チマヒ、スカブミは、上流に水田開拓が容易な一帯を持つ地点が選択され建設された可能性がある。ウィルデはプリアンガン地方において幹線道路沿いの集落の負担の重さを問題視しているが [Wilde 1830: 186-187, 192-193, 225-226]、本稿対象4郡の検討からは、チマヒ・チフラン両郡の沿道集落において幹線道路の維持や輸送に関わる負担がチアンジュール盆地内の諸郡と比較してはるかに重いことが窺われる。これは本稿対象4郡で生産される産物のほかにチアンジュール盆地、そしてインド洋側の諸郡の産物が通過するためであろう。輸送力増強を目的とした水田開拓は、別稿で検討したクラワン (Krawang) 州に近い交通の要衝においてさらに明確となる [大橋 1999]。

2) さらにホードレイ説とのいま一つの相違点であり、かつチアンジュール盆地の開拓には認められなかった点として、椰子砂糖や果物生産を目的とした、必ずしも水田耕作とコーヒー栽培に限定されない開発・入植が注目に値する規模で存在したことが挙げられる。当時チチュルク・チフラン両郡は、チマヒ・グヌンパラン郡と比較して利益の上がらない郡であると考えられていたが [Haan 1910-12: Vol. 1, 293]、当時最も重視された産物はコーヒーと米穀であったので、コーヒーなどの輸送の負担が重く、かつ椰子砂糖および果樹生産が盛んであった前二

者は植民地権力にとって「金の卵を生むニワトリ」ではなかったためであろう。¹⁴⁾ ホードレイによるコーヒーおよび米以外の捨象は、おそらくこのような植民地権力の視角を踏襲したものと思われる。

3) 一方、筆者が前稿 [大橋 1998: 90] で指摘した 1820 年代プリアンガン地方における複合社会の萌芽的状況の出現について、本稿の検討では集落名からジャワ語、マレー語を日常言語とする人々の入植の可能性を指摘した。さらにウィルデの次のような記述は、言語習慣がスンダ人と異なる人々の入植を裏付けよう。すなわち 1) プリアンガン地方の住民をスンダ人ではなくジャワ人と書き記していたこと、2) 私領地の住民をスカブミ人なる名の下に一つの家族の如く統合しようとしたこと、3) 住民統治にイスラム教を利用したこと、そして 4) プリアンガン地方の開発にバリ人など人口稠密な他島の住民の利用を提案したこと [Wilde 1830: 236] である。なお幹線道路からはずれた新開地で中国人の宗教施設を示す集落名が存在すること、およびこの時期の私領地には他地域と比べて多くの中国人が居住していたことは、中国人が商業ばかりでなく開拓にも関わったことが窺われる。

もちろんこれらは薄弱な状況証拠に過ぎないが、チアンジュール-レヘント統治地域で行われた当時の急速な開拓がスンダ人のみで担い得たと思われぬ規模であること、西ジャワの北海岸・中部ジャワより大量の流入者が認められることを考えるならば、指摘するに足るものであると考える。このような様々なエスニックグループの入植・開拓の問題については、今後、考察方法の開発をも含めて注意深く調査を進めて行きたい。

4) 筆者は前稿で、(1) コーヒー生産の負担は、18 世紀後半から徐々に開拓された水田地帯に居住する住民の方が、19 世紀に入ってから大規模灌漑工事や大規模入植によって開拓された地域の住民より重いこと、(2) コーヒー生産の負担は輸送の難易と相関していること、そして (3) そのため幹線道路より遠い一帯で行われることの多かった大規模灌漑工事の受益者の負担が相対的に軽くなる傾向にあることを指摘した。本稿対象地域の郡より小さい行政単位のコーヒー負担を示す史料はないが、「人口統計」が示す労役可能男女数や戸数の傾向からは、やはり開発が古く徐々に水田化されたスカラジャ北部、チマヒ郡では住民の負担が重いと考えられる。これに対して開拓が比較的新しい地域では、チマヒ郡の幹線道路沿いで 19 世紀に入って灌漑工事と共に開発された地域以外は、住民の負担は逃亡者を生むほどではなかったと推測される。

この原因については、第 1 に未だ開発途上の一帯では賦役貢納を免除されていた者の比率が高かった可能性が挙げられる。しかし開拓時の賦役貢納免除期間は長くても 3 年であり、すべ

14) チフラン・チチュルク両郡ではコーヒーに不向きな何らかの生態的条件が存在したと考えられる。一般的にプリアンガン地方では、高山の西側山麓は小雨であり不毛である場合が多い。

てを説明することは難しい。第2には、植民地権力が未だ20世紀の如き均一的空間支配を行い得ず、幹線道路沿線支配のみに甘んじていた可能性が挙げられる。すなわち交通輸送の便が良く古くから開拓され現地人支配層が多数居住する一帯では、住民は一般に現地人支配層および植民地権力の保護と、商業や輸送の利益を容易に得られる一方で、過重な負担を要求された場合には逃亡以外の手段で忌諱することは難しい。その一方で19世紀初頭以降に始まる交通・輸送条件の良くない場所での大規模灌漑施設の建設や辺境への入植は、コーヒー生産・輸送における植民地権力側の必要もあるものの、多分に自由主義的オランダ人官僚の原住民福祉の理念に支えられていた〔大橋 1997: 23-26; 本稿第I章〕。くわえて交通の不便さ、権力関係の新しさの故に植民地権力のコントロールが行き届かず、入植者は灌漑施設等を利用だけして義務を逃れ得たのではないかと考えられる。とすれば、彼らはコーヒー栽培・輸送と関わりの薄い生活を送っていた可能性がある。

最後に本論の作業過程で出現した2つの派生的問題について述べたい。第1は、当時の「私領地」理解の2面性である。政庁のあるバタビアでは、「私領地」所有者は、賦役貢納収権付きとはいえ、第1に土地を私的に所有する者である。しかしプリアンガン地方で実際に活動するオランダ人や現地社会の人々にとって、「私領地」所有者は土地所有者というよりは賦役貢納を収取する者であった。本稿対象地域では、「私領地」であるにも関わらず耕地は住民が売買自由な占有権をもつとオランダ人が認識する一方で、私領地の境界線は荒蕪地ではきわめて曖昧となっていたのである。このような中央における法制と地方の現実の2面性は、本稿対象期や「私領地」に限らずインドネシア史の至る所に顔を出す重要な問題であり、各種事例の比較検討はインドネシア理解を深めるものと思われる。

第2は、本稿で述べたウィルデの私領地経営方法とその前後のインドネシアの歴史との関わりである。ウィルデによる米穀および換金作物収奪の方法は、1830年に開始される強制裁培制度と酷似し、政策史的に見るとファン＝デン＝ボスはウィルデの経営を参考にした可能性が大である。ではウィルデは何を参考にしたのであろうか。くわえて私領地に出現したであろう複合社会、多民族社会をスカブミという一つの名の下に一つの家族のように統合するという考え方は、何に由来し誰が受け継いで来た考え方だったのだろうか。イスラム教の影響はどの程度見られるのであろうか。

以上、本稿では中間報告的に筆者の問題関心の枠組みを提示した。ご批判いただければ幸いです。

謝 辞

本稿の作成にあたっては、京都大学東南アジア研究センターの共同研究「フロンティア社会の地域間比

較研究」(代表 田中耕司教授)に参集なさる諸先生方、およびレフェリーの先生方に多くの御教示を得た。ここに感謝の意を表したい。

参 考 文 献

未公刊文書

インドネシア国立公文書館所蔵

プリアンガン理事州地方文書

Algemeen Verslag, Preanger Regentschappen. 1827, 1828/29, 1830/31/32

Statistiek Handboekje 1828

Bevolking van het Regentschap Tjanjor in December 1827

栽培文書 1816-1920

No. 267 Koffij Report 1818

オランダ国立公文書館所蔵 G. H. CHR. Schneither コレクション

Algemeen Verslag, Preanger Regentschappen. 1823, 1824.

公刊文書・研究文献

Andaya, B. W. 1993. *To Live as Brothers, Southeast Sumatra in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Honolulu: University of Hawaii Press.

_____. 1998. Final Report "Engendering History in Early Modern Southeast Asia." Honolulu: University of Hawai'i.

Anonymous. 1856. Hoe't er vroeger in de Bataviasche bovenlanden en de Preanger regentschappen uitzag. *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indie* 1856(2): 161-180.

_____. 1875. Reisje uit de Preangerlanden naar de Zuidzee (Zuidkust van Java) in het belang van het mijnwezen in 1730 ondernomen. *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indie* 1875(1): 1-11.

Chijs, J. A. van der, ed. 1885-1900. *Nederlandsch-Indisch Plakaat-boek*. 17 vols. Batavia.

Coolsma, S. 1913. *Soendaneesh-Hollandsch Woordenboek*. 2de druk. Leiden: A. W. Sijthoff's Uitgeversmaatschappij.

Eringa, F. S. 1984. *Soendaas-Nederlands Woordenboek*. Dordrecht, Cinnaminson: Foris Publications Holland.

藤原利一郎. 1986. 「黎朝後期鄭氏の華僑対策」『東南アジア史の研究』236-256 ページ所収. 京都: 法蔵館.

Furnivall, J. S. 1944. *Netherlands India: A Study of Plural Economy*. Cambridge.

Haan, F. de. 1910-12. *Priangan, De Preanger-regentschappen onder het Nederlandsch bestuur tot 1811*. 4 vols. Batavia: G. Kolff & Co.

Hoadley, M. C. 1994. *Towards a Feudal Mode of Production West Java, 1680-1800*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Jonge, Jhr. J. K. J. de, ed. 1862-1888. *De Opkomst van het Nederlandsch gezag in Oost Indie, verzameling van het onuitgegeven stukken uit het Oud Koloniaal Archief (1595-1814)*. 13 vols. s'Gravenhage: Martinus Nijhoff.

Kathirithamby-Wells, J.; and Villiers, J., eds. 1990. *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.

Klein, J. W. de. [1932]. *Het Preangerstelsel (1677-1871) en zijn nawerking*. Delft.

クロム, N. J. 1985. 『インドネシア古代史』有吉 巖 (編訳), 天理南方文化研究会 (監修). 天理: 天理道友会.

Legge, J. D. 1980. *Indonesia*. Australia: Prentice-Hall.

前田成文. 1991. 「東南アジア・フロンティア論をめぐって」『フロンティア空間としての東南アジア』(平成2年度科学研究費補助金研究成果報告集) 高谷好一 (編). 京都: 東南アジア研究センター.

Meskill, J. M. 1979. *A Chinese Pioneer Family: The Lins of Wu-feng, Taiwan 1729-1895*. Princeton University Press.

- 永瀧康之. 1998. 『バリ島』(講談社現代新書 1395). 東京: 講談社.
- 大橋厚子. 1987. 「ジャワ島西部におけるコーヒー義務供出制度の変質——コーヒー生産管理の展開」『アジア・アフリカ言語文化研究』34: 77-93.
- _____. 1989. 「ジャワ島プリアンガン地方におけるコーヒー労役の強化について——一八世紀半ばから一九世紀初めまで」『東方学』78: 111-126.
- _____. 1993. 「植民地期ジャワ・プリアンガンにおける下級首長制」『アジア経済』34 (7): 23-40.
- _____. 1994a. 「ジャワ島プリアンガン地方におけるコーヒー輸送と現地人首長レヘント」『東南アジア研究』32 (1): 66-119.
- _____. 1994b. 「強制裁培制度」『変わる東南アジア史像』219-239 ページ所収. 東京: 山川出版社.
- _____. 1994c. 「オランダ植民地支配と農作業歴——1820年代のプリアンガン地方の場合」『東洋史研究』53 (3): 128-154.
- _____. 1995. 「西ジャワ・プリアンガン地方の下級首長とコーヒー輸送——1820年代を中心に」『アジア経済』36 (11): 24-46.
- _____. 1996. 「1820年代のプリアンガン理事州の郡編成——チアンジュールおよびバンドン-レヘント統治地域の統計から」『南方文化』23: 55-78.
- _____. 1997. 「プリアンガン地方の水田開拓とオランダ植民地権力——1820年代を中心に」『東南アジア——歴史と文化』26: 14-36.
- _____. 1998. 「ジャワ島チアンジュール盆地開拓試論——1820年代を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』55: 73-92.
- _____. 1999. 「1820年代チアンジュール-レヘント統治地域の開拓——コーヒー生産を目的としない開拓」『史苑』60 (1): 5-40.
- Reid, A., ed. 1997. *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. London: Macmillan & New York: St. Martin.
- 桜井由躬雄; 石澤良昭; 桐山昇. 1993. 『東南アジア』(地域からの世界史4). 東京: 朝日新聞社.
- 参謀本部陸地測量部. 1943. 「五万分の一図ジャワ島」摂南大学・京都大学東南アジア研究センター所蔵.
- 鈴木恒之. 1976. 「アチェー西海岸におけるコショウ栽培の発展と新ナングルの形成——18世紀末から19世紀前半の」『東南アジア——歴史と文化』6: 62-93.
- 高谷好一. 1988. 『マングローブに生きる——熱帯多雨林の生態史』(NHK ブックス).
- _____. 1990. 『米をどう捉えるのか』(NHK ブックス).
- _____. 1996. 『「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』京都: 京都大学学術出版会.
- 武内房司. 1994. 「清代貴州東南部ミャオ族にみる『漢化』の一側面——林業経営を中心に」『儀礼・民族・境界——華南諸民族「漢化」の諸相』竹村卓二(編), 81-103 ページ所収. 東京: 風響社.
- _____. 1997. 「清代清水江流域の木材交易と存地少数民族商人」『学習院史学』35: 71-89.
- Tarling, N., ed. 1992. *The Cambridge History of Southeast Asia, Volume One, From Early Times to c. 1800*. Cambridge University Press.
- 坪内良博. 1986. 『東南アジア人口民族史』勁草書房.
- _____. 1998. 『小人口世界の人口誌——東南アジアの風土と社会』京都: 京都大学学術出版会.
- _____(編). 1999. 『〈総合的地域研究〉を求めて——東南アジア像を手がかりに』京都: 京都大学学術出版会.
- 上田 信. 1994. 「中国における生態システムと山区経済——秦嶺山脈の事例から」『長期社会変動』アジアから考える(6) 溝口雄三他(編), 99-129 ページ所収. 東京: 東京大学出版会.
- 和田博徳. 1961. 「清代のベトナム・ビルマ銀」『史学』33 (3・4).
- Wallerstein, I. 1989. *The Modern World-System III, The Second Era of Great Expansion of the Capitalist World-Economy, 1730-1840s*. San Diego: Academic Press Inc.
- ウォーラーステイン, I. 1997. 『近代世界システム 1730 ~ 1840s——大西洋革命の時代』川北 稔(訳).
- Wilde, A. de. 1830. *De Preanger Regentschappen op Java gelegen*. Amsterdam: M. Westerman.
- 柳 哲雄. 1996. 「東南アジアの水循環」『水循環から見た東南アジア』(重点領域「総合的地域研究」成果報告書シリーズ No. 22) 柳 哲雄(編).